VIEW'S

2009
February
2月
高校版
Volume
6

CONTENTS

2 私を育てたあの時代、あの出会い

言葉ではなく、指導する姿からすべてを学んだ
京都府・洛南高校◎菊池竜三郎

4 特集

新課程のポイントと高校教育への影響

6 インタビュー 新課程を「学校の目標づくり」に生かしていく
国立教育政策研究所初等中等教育研究部長◎工藤文三

10 解説 中学校の新課程で押さえるべきポイント

12 座談会 新課程に高校現場はいかに向き合うべきか
岩手県立盛岡第一高校◎及川満／東京都立日比谷高校◎臼田浩一
宮崎県立宮崎大宮高校◎宮野原章史／鹿児島県立鶴丸高校◎秋元達也

16 データで見る中学校

「生徒間の学力格差」の拡大を約7割の教師が認識
Benesse教育研究開発センター「第4回学習指導基本調査」より

17 指導変革の軌跡

18 福井県立美方高校
取り組みの効果的な導入と改善◎改革精神の継承と地域の支援が教師の改革への熱意を支える

22 千葉県立千葉東高校
柔軟性のある進路指導の導入◎「柔構造」が学校の活性化を生み、生徒との信頼関係を構築する

26 東京都立小平西高校
達成体験を活用した学校改革◎「私はできる」を軸とした「小西スタイル」で全国一の進路多様校を目指す

30 10代のための「学び」考

原 實 東京大名誉教授、日本学士院会員
自身の感性を信じて、自分にしかできない研究に挑む

32 未来をつくる大学の研究室

脳科学 玉川大 脳科学研究所 脳科学研究センター

36 VIEW'S REPORT①

英語ディベートを通して全国に広がる友情の輪
第3回全国高校生英語ディベート大会

38 VIEW'S REPORT②

30代教師が語る指導の悩み

41 教える現場、育てる言葉

人に興味を持ち、人の話を聞くことが俳優としての第一歩
文学座附属演劇研究所

44 生きたデータの見せ方・つくり方

1年生春休み前後の学習意識の向上

48 VIEW'S SQUARE

本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。

本文中、敬称略。

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

洛南高校の教師になったのは、大学を卒業した1988年です。そしてそのとき、職員室で隣の席だったのが白潟一則先生です。白潟先生は民間企業を経て洛南高校の教師になった方で、教職歴は私より10年ほど先輩です。私が配属された高2学年で担任を務めていらっしゃった先生は、教科は異なりますが、新任の私の教育係になってくださったのです。

ところが、私は白潟先生に、1年間ほとんど話をしてもらえませんでした。用があって話しかけても返事は「ああ」「うん」くらい。私は右も左もわからない状態なのに、「こうするといいよ」といった教育係らしいアドバイスは全くありません。ほかの先生とは気軽に話をし、生徒とも楽しそうに接しているのに、なぜ自分に話をしてくれないのか。次第に私は白潟先生のことを「怖い先生だ」と思うようになりました。一度、先生が入院して学校を休んだときには、正直ほっとしたくらいです。

これだけ話をしてくれないのは何か意図があるはずだ、とも

私を育てた あの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

言葉ではなく、指導する姿からすべてを学んだ

京都府・洛南高校 **菊池竜三郎** KIKUCHI RYUZABURO

今を支えるベテランから次代を担う若手への知識と技術の継承はどのような業種、職種においても軽視できない重要なテーマだ。だが、教師という仕事においては、言葉だけでは伝えきれないマインドの継承がとりわけ大切である。熱き思いを持つ教師があえてその口をつぐみ、自らの背中で道を指し示したとき、後輩教師は何を感じたのか――。京都府・洛南高校の菊池竜三郎先生が「無言の教え」を振り返る。

撮影◎京都府・洛南高校にて

右 きくち・りゅうざぶろう　1988年より洛南高校勤務。国語科。校内での指導に加え、現在は学生寮の舎監として寮生の生活を見守る。附属小学校設立準備委員。

左 しらがた・かずのり　5年間の民間企業勤務を経て、1978年より洛南高校の教壇に立つ。数学科。現在は同校の総合企画部長。附属小学校設立準備委員。

先輩教師の言葉

生徒と向き合い私のすべてを受け継いでくれた

京都府・洛南高校
SHIRAGATA KAZUNORI **白潟一則**

教科指導のノウハウは先輩教師としてある程度教えることができても、生活指導や進路指導など、生徒一人ひとりに向き合う指導は、言葉で教えてわかるものではない。私はそう思っています。だから、新任として私の隣の席に座った菊池先生には、聞いて習うより、私自身を見てそこから学んでほしいし、そうしてもらうしかないと思ったのです。だから、最初の1年間は、ほとんど話をしませんでした。今思えば、辛抱強く付いてきてくれたと思います。

寮の副舎監として働いてくれたとき、菊池先生には、学校から寮に帰ってきたら、教師であることを忘れて、1人の人間として弱さや醜態も生徒に見せてほしいと思っていました。寮は生徒にとって生活の場です。私たちが教師のままでは心が安ま

思いました。しかし、若く、無我夢中だった私には、先輩である白潟先生にそれを質す余裕も度胸もありませんでした。ただ、あれこれ教えてもらえない分、先生の言動をしっかりと追いかけて学ぼうと一生懸命でした。

2年め、私は寮の副舎監の1人として、当時舎監だった白潟先生の下で働くことになりました。先生は私に「部屋を回りなさい」とだけおっしゃいました。私はその言葉の通り、生徒の部屋を回りました。生徒と年齢が近かったこともあって、すぐに兄弟のような感覚でいろいろと語り合うようになりました。進路や勉強の悩みを抱え、眠れない夜を過ごす彼らと話をするうちに、寮という場所では、教師としてではなく、素顔の自分で生徒と付き合うべきだと私は気づきました。

白潟先生の無言には確かに意味がある。それがわかったのはこのころです。言葉で教えられて学ぶのではなく、先輩方が実際に生徒と接する姿から学び、そして自分も生徒と向き合ってみて自分なりに学んでいくしかない。白潟先生はそれを私に伝えようとしているのだ――。

3年めからは、白潟先生は私を他校の先生との進路指導の勉強会に頻繁に連れて行ってくれるようになりました。先生は、「初めて会う先生にも正直に話をしなさい」とおっしゃいました。実際、先生は聞かれたことは何でも正直に答えていました。「僕にもそこまで教えてくれていないのに！」と驚くことも何度もありました。けれども、そうすることで相手の先生も白潟先生のことを信じ、深い話をしてくれる。そばで聞く私にとっては、視野を広げるだけでなく、自分の学校での取り組みを考える絶好の機会になりました。

学校にも慣れ、高校教師という仕事も大まかにわかってきた8年め。私は初めて進学クラスの担任として、受験を迎えることになりました。このときも白潟先生は同じ学年の担任として、私のそばにいました。しかし、3年間同じように指導してきたはずなのに、入試の結果は大きく異なりました。先生のクラスからは合格最低点で京都大に合格者を出すのに、私のクラスはすれすれのところで不合格になってしまう。模試の成績もそれほど変わらなかったのに…。微妙な違いが、最後に大きな差を生むのが高校の指導であり、しかもその要諦は解説書のようなもので説明できるものではない。教師の仕事は、職人のようなものなのだと気づかされました。

私は、初心に戻って、白潟先生がどんな指導をされているのか、懸命に追いかけました。違いは普段の生徒の様子の中にたくさん見つかりました。例えば、掃除をしっかりしていること、HRで担任の話にきちんと耳を傾けていること。文化祭やスポーツ大会でもよい成果を上げているのはいつも白潟学級でした。こうした日々の指導が最後の差になるのだと実感しました。

これはと思える指導は積極的に取り入れました。面談の進め方もその一つです。全員に面談したあと、時間をおかず気になる生徒には2回めの面談を実施する。すると、最初の面談で何も問題が見つからなかった生徒から「実は…」と進路や家庭の悩みなどが明らかになりました。

私も中堅といわれる年齢になりました。白潟先生から学んできたものは、若い人に受け継いでいきたいと思っています。けれども、大切なものほど言葉では説明できず、何年もかけて生徒と実際に触れ合いながら学んでいくしかない。私たちの仕事が生徒一人ひとりを育てるものである以上、時間がかかるのは当然なのだと思います。

りません。兄貴のように、父親のように、素顔の自分で振る舞ってもらいたい。でも、そのことも生徒と接する中で気が付いてほしい。だから私は「とにかく部屋を回れ」とだけ言ったのです。夜中に1人悩んでいる生徒に接することで、菊池先生はそのことにすぐに気が付いてくれました。

担任としても、具体的にクラス運営についてあれこれと教えたことはありません。ただ、生徒が気持ちよく1日を過ごすことができ、そして勉強しようと思える環境をつくることの大切さに早く気が付いてほしいと思っていました。実際、教室をきれいにするといったことを私のクラスはとても大切にしていたのです。最後に強いのは、生徒が勉強をしようという気持ちになれる環境が整っているクラスです。勉強するのは生徒本人であり、私たち教師にできることはその環境をつくることだけなのですから。

菊池先生とはもう21年の付き合いになります。確かに言葉で引き継いだものは少なかったかもしれませんが、生徒と向き合う姿はたくさん見てもらえました。そして、生徒指導に関しては、私の持っているものは全部菊池先生に渡すことができた、と思っています。

※プロフィールは取材時（08年12月）のものです

SPECIAL ISSUE

特集

新課程のポイントと高校教育への影響

高校の新学習指導要領（以下、新課程）告示案が2008年12月に公表された（注）。
数学・理科は12年度から先行実施され、13年度から学年進行で全面実施となる。
小・中学校の新課程は既に08年3月に告示され、中学校では12年度から全面実施となる。
今回の新課程は、現行課程と何が違うのか。
高校現場にどのような影響があるのかを探る。

〈注〉正式な告示は2008年度中の予定（2009年1月時点）

1 新課程で押さえておくべきポイント

基本的な考え方

「生きる力を育成」「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成」
「豊かな心と健やかな体を育成」

卒業単位数、必履修科目、教育課程編成時の配慮事項等

卒業までに修得させる単位数は、現行どおり74単位以上

国語、数学、外国語に共通必履修科目を設定

理科の科目履修の柔軟性を向上

週当たりの授業時数（全日制）は、標準の30単位時間を超えて実施可能であることを明確化

義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るための学習機会設置の促進

教育内容の主な改善事項

言語活動の充実
・国語をはじめ各教科等で批評、論述、討論などの学習を充実

理数教育の充実
・近年の新しい科学的見地に対応する観点から指導内容を刷新
・統計に関する内容を必修化（数学Ⅰ）
・知識・技能を活用する学習や探究する学習を重視
・指導内容と日常生活や社会との関連を重視（理科「科学と人間生活」の新設）

外国語教育の充実
・高校で指導する標準的な単語数を1,300語から1,800語に増加（英語）
・授業は英語で指導することを基本とする

「はどめ規定」（詳細な事項は扱わないなどの規定）を原則削除

＊このほかに「伝統や文化に関する教育の充実」「道徳教育の充実」「体験活動の充実」
「職業に関する教科・科目の改善」などが挙げられている

＊文部科学省「高等学校学習指導要領改訂案のポイント」（2008年12月）を基に編集部で作成

2 4人の教師が考える学校現場への影響

【関連記事は、P.12「座談会」】

中学校・高校の教科学習内容が質量共に充実した点は評価

中学生の学習歴・通塾状況などの変化を的確に把握する必要がある

「言語活動の充実」「活用の重視」は今の指導を基に行える

今回の改訂を学校の教育目標を改めて考える契機に

▼

まず、「何をするか」を決めるために、学習指導要領をしっかり読むことから始める

インタビュー

新課程を「学校の目標づくり」に生かしていく

国立教育政策研究所初等中等教育研究部長　工藤文三

2008年12月、文部科学省より高校の新課程の告示案が発表された。この改訂により、高校教育はどのように変わるのか。また、これを契機に取り組むべきことは何なのか。国立教育政策研究所初等中等教育研究部の工藤文三部長に話を聞いた。

新課程を貫く三つの視点

今回、告示案が発表された高校の新課程は、現行課程のように完全学校週五日制の実施や「総合的な学習の時間」の導入といった大きな変更がないこともあり、変化に乏しいと受け止められているようです。ただ、学校現場の実態や近年の教育課題を反映した、完成度の高いものになっています。

改訂の方向性は、おおよそ次の三つに分けられます。

一つめは、「教育基本法」と「学校教育法」の二つの上位法令の改正に伴う改訂です。教育基本法で謳(うた)われた伝統や文化の尊重、公共の精神の涵(かん)養は、各教科の内容や道徳教育の充実などに反映されています。また、学校教育法30条2項に合わせて、総則では「基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等の育成」が掲げられました。多くの教科で「活用の重視」が掲げられ、理科に「探究活動」が導入されたのは、そのためです。

二つめは、現場の工夫を生かそうとしている点です。「週当たりの授業時数が30単位時間を超えてもよい」とする規定は、学校現場の実態を踏まえ、各学校の裁量を認めるものです。「10分間程度の教科の学習などを年間授業時数に算入できる」という規定も、中学校では既に行われていることの意義を確認したものといえます。

三つめは、ここ数年に渡って議論されてきた教育課題の克服を目指した改訂という点です。「言語活動の充実」が各教科で掲げられているのは、PISA（OECDによる国際的な学習到達度調査）の結果によって、読解力に課題があることが明ら

国立教育政策研究所
初等中等教育研究部長
工藤文三 Kudo Bunzo
公立高校教諭を務めたあと、国立教育研究所（現・国立教育政策研究所）の研究官に就任。教科教育開発研究室長等を経て、05年度から現職。

特集

新課程のポイントと高校教育への影響

かになったことを受けての措置でしょう。「主体的な学習態度」「学習習慣の定着」「家庭との連携」などが強調されているのも、各種の調査から浮き彫りになった課題を受け止めているからです。

新課程は、縦横によく練られた内容になっており、趣旨を正しく理解し、実践することによって、高い教育効果を期待できるものになっています。

新課程が現場に与える影響

教育課程編成の課題

新課程は、学校現場にどのような変化をもたらすのでしょうか。

実務レベルで多くの学校が直面するのは、教育課程編成上の課題です。今回の改訂では、卒業に必要な単位数は現行と同じ「74単位以上」と規定されましたが、教科ごとに見ると科目編成や標準単位数において変更があります（**図1**）。特に、単位数が増えた科目については、類型の組み方や科目選択の仕方など、教育課程やカリキュラム編成の工夫が必要

図1　新旧課程の科目対応表

＊科目構成、単位数に変化のあった教科のみ記載

	改訂案			現　行		
教科	科　目	標準単位数	必履修科目	科　目	標準単位数	必履修科目
国語	国語総合	4	○ 2単位まで減可	国語表現Ⅰ	2	○ いずれか1科目
	国語表現	3		国語表現Ⅱ	2	
	現代文A	2		国語総合	4	
	現代文B	4		現代文	4	
	古典A	2		古典	4	
	古典B	4		古典講読	2	
数学	数学Ⅰ	3	○ 2単位まで減可	数学基礎	2	○ いずれか1科目
	数学Ⅱ	4		数学Ⅰ	3	
	数学Ⅲ	5		数学Ⅱ	4	
	数学A	2		数学Ⅲ	3	
	数学B	2		数学A	2	
	数学活用	2		数学B	2	
				数学C	2	
理科	科学と人間生活	2	「科学と人間生活」を含む2科目または基礎を付した科目を3科目	理科基礎	2	2科目（「理科基礎」「理科総合A」または「理科総合B」を少なくとも1科目含む）
	物理基礎	2		理科総合A	2	
	物理	4		理科総合B	2	
	化学基礎	2		物理Ⅰ	3	
	化学	4		物理Ⅱ	3	
	生物基礎	2		化学Ⅰ	3	
	生物	4		化学Ⅱ	3	
	地学基礎	2		生物Ⅰ	3	
	地学	4		生物Ⅱ	3	
	理科課題研究	1		地学Ⅰ	3	
				地学Ⅱ	3	
外国語	コミュニケーション英語基礎	2	○ 2単位まで減可	オーラル・コミュニケーションⅠ	2	○ いずれか1科目
	コミュニケーション英語Ⅰ	3		オーラル・コミュニケーションⅡ	4	
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		英語Ⅰ	3	
	コミュニケーション英語Ⅲ	4		英語Ⅱ	4	
	英語表現Ⅰ	2		リーディング	4	
	英語表現Ⅱ	4		ライティング	4	
	英語会話	2				
家庭	家庭基礎	2	○ いずれか1科目	家庭基礎	2	○ いずれか1科目
	家庭総合	4		家庭総合	4	
	生活デザイン	4		生活技術	4	
情報	社会と情報	2	○ いずれか1科目	情報A	2	○ いずれか1科目
	情報の科学	2		情報B	2	
				情報C	2	
	総合的な学習の時間	3～6	○ 2単位まで減可	総合的な学習の時間	3～6	○

＊文部科学省「高等学校学習指導要領改訂案のポイント」を基に編集部が作成

になります。

例えば、「物理Ⅰ・Ⅱ」は現行課程では各3単位でしたが、新課程では「物理基礎」2単位と「物理」4単位になります。現行の「物理Ⅱ」を新課程の「物理」に置き換えた場合、3単位から4単位になりますから、これまで通り1年間で履修させようとすると、授業はかなりハードになります。例えば、2年生で4単位をすべて履修させるのか、あるいは2・3年生で2単位ずつ分けて履修させるのか、生徒の学力や教師の指導体制を踏まえてカリキュラム編成を考えなければなりません。

また、**数学・理科は2012年度から先行実施される予定となっています**。先行実施をする理由は、中学校では09年度から数学・理科が先行実施されるため、新課程を中学校で3年間学習した生徒が12年度に高校に入学してくるからです（**図2**）。ほかの教科が現行課程の状態で、数学と理科のみが前倒しとなるカリキュラムをどのように編成するのかも課題となるでしょう。

学校によっては、単位数の増加に伴い、非常勤講師も含め教師の手当てを考える必要に迫られる可能性もあります。標準単位数が3単位から4単位になれば、当然授業時間が増加することになるからです。

義務教育との接続

今回の改訂では、義務教育段階での学力向上を図るため、特に数学と理科について、前回の改訂で中学校から高校に移行した項目の多くを再び中学校に戻し、その分、高校段階で削除した項目を新しく加えています。それに伴い、「義務教育段階の学習内容の確実な定着」が初めて明言されました。

総則には次の三つの例が挙げられています。

①義務教育段階の学習内容の定着を図るための学習機会を設ける

②必履修教科・科目の単位数を増加させ十分な習得を図る

③（義務教育段階の学習内容の定着を目的とした）学校設定科目を開設し、必履修科目の前に履修させる

学習指導要領に義務教育段階との接続が明記され、総則に具体的な方法まで記されるのは初めてのことです。既に多くの学校が、入学前に学力診断テストを実施したり、入学前課題を出したりして、生徒の学力把握と学力定着に力を入れています。今回、総則に記された点に、強いメッセージが読み取れます。

はどめ規定の撤廃

学力低下の指摘に留意して、「はどめ規定」が原則、削除されることになりました。生徒の実態を踏まえて、より深い学習内容を指導することも可能となります。

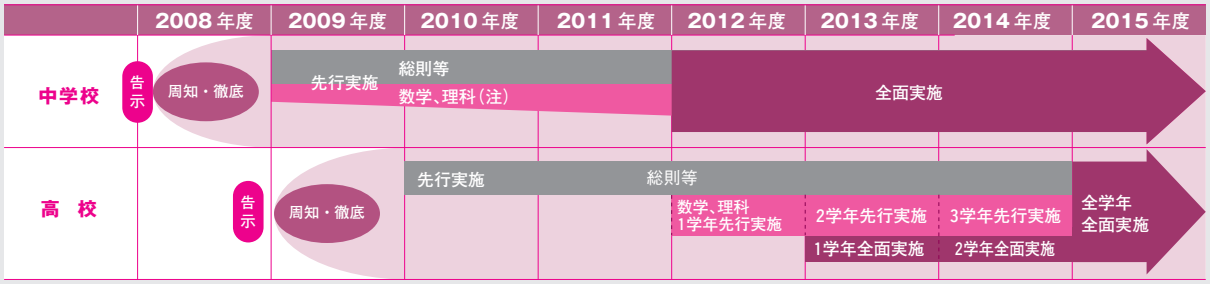
言語活動の充実

各教科等の中に「言語活動の充実」が明示されたことも、大きなポイントの一つです。

数学では、例えば「自らの考えを数学的に表現し根拠を明らかにして説明したり議論したりする」、公民では「資料の収集、選択、読み取り、解釈や論述、討論などの学習活動の重視」というように、各教科で記録、論述、討論などの学習を充実させる

図2 新課程の実施スケジュール

＊正式な告示は08年度中。解説書は09年度中に発行、指導要録は09年度中に検討が始まる予定



＊文部科学省「新学習指導要領の実施スケジュール（概要）」を基に編集部で作成　　注：詳細はP.11図3参照

ことが明記されました。

「言語活動の充実」をどのように指導に盛り込めばよいのか、不安に感じるかもしれません。しかし、これらは新しい取り組みなのかというと、決してそうではありません。例えば、数学の授業で、生徒に立式の過程を黒板に書かせ、教師が解説を加えるという指導は、普段よく行われていることでしょう。この場面を利用して、問題の解答・解説を黒板に書いた生徒自身、またはほかの生徒にさせるといった活動も、言語活動を重視した取り組みに当たると思います。

つまり、「言語活動」という観点を意識しながら、これまでの指導を整理してみることが大切です。

また、学習指導要領に盛り込まれたことは、教科書に反映されます。教科書も含めて、指導方法などを検討することが求められます。

英語は英語を使って授業

「言語活動」に関連して、「英語の授業はすべて英語で行うことを基本とする」という方針も打ち出されました。これは、マスコミでも大きく取り上げられました。

基礎学力が不足している生徒が多い高校では、英語の授業をすべて英語で行うと、生徒が拒否反応を示すかもしれません。大学入試との関連も、課題の一つだと思います。まずは、先行して実施される小学校、中学校での英語の指導との関連を考慮し、なおかつ生徒の実態を踏まえて、英語を使って授業を進めていくことが求められます。

授業研究・教材研究で指導力向上を図る

このように、新課程は今日的な課題に対応した構成となっています。

中学校・高校共に現行課程に比べて学習内容が充実している以上、学力を底上げする効果は高いと考えられます。ただ、そのためには、教師一人ひとりがこの新課程の趣旨をしっかり理解し、効果的に実践することが求められます。

今回の改訂を踏まえて、教師にはどのような心構えが必要なのでしょうか。前回の改訂では、内容が厳選されたために、教える内容自体はシンプルになった面もありました。しかし、今回の改訂では、数学・理科について、科目によっては内容的にも高度になりました。特に、生徒の学力層の幅が広い高校では、内容をいかにわかりやすく伝えるか、上手な教材づくりに結び付けられるかが問われるでしょう。授業研究・教材研究をしっかり行い、指導力を磨く必要があります。

他教科にも目を向け学校全体の足並みをそろえる

もう一つ、留意する必要があるのは、学校全体で「自校がどのような生徒を育てようとしているのかを改めて考える」ということです。

今回の改訂では、「伝統や文化の尊重」「言語活動の充実」など、大半の教科に共通する具体的な事項が多く盛り込まれています。担当教科の改訂事項を読むだけでは、なぜそのようなことをしなければならないのかが見えてこないこともあります。ほかの教科の取り組みにも目を向けて、教育課程全体でどのような力を育てようとしているのかをしっかり把握し、担当教科の位置付けを改めて考えてほしいと思うのです。そうすることによって、課題の解決や目標の策定に向けて、学校全体の足並みがそろっていくのではないでしょうか。

また、小・中学校では、今回初めて「学習指導要領」の冊子が教師一人ひとりに配られました。学校全体が同じ目標に向かって進んでいく流れをあと押ししてくれるものと考えます。

新課程は13年度から学年進行で実施される予定です（図2）。09年度中は内容の周知・徹底を進め、10年度から総則等の先行実施となります。準備をしっかりと行い、新課程の趣旨の実現をめざしていただきたいと思います。

解説

中学校の新課程で押さえるべきポイント

中学校の新課程は、2009年度から移行措置が始まる。まず数学・理科が09年度から先行実施され、全面実施は12年度からとなる。小・中・高を通じて、活用の重視、言語活動の充実、理数教育の充実などが謳われ、授業時数や学習内容が増加されることが、大きな変更点といえる。

ポイント1 数学、理科、外国語を中心に授業時数が増加

中学校の新課程も、高校の改訂案と同様に「活用の重視」「言語活動の充実」が各教科で謳われている。

中学校の授業時数については、各学年共に週当たり1コマ増となる（図1）。教科ごとに見ると、授業時数が増えるのは国語、社会、数学、理科、保健体育、外国語で、中学3年間で1教科当たり35～105時間増となる。特に数学、理科、外国語の増加が目立つ。

「総合的な学習の時間」の授業時数は、現行課程では「選択教科等」と共に弾力的に設定され、3年間で45～170時間の幅で各校が自校の事情に合わせて決められるが、新課程では、標準授業時数が1学年では年間50時間、2・3学年では年間70時間と定められる。1学年では事実上、週当たり1コマ減ることになる。

ポイント2 選択教科等の枠組みがなくなる

「選択教科等」は枠組みそのものがなくなり、標準授業時数の枠外で開設可能となる。現行課程では「個性を生かす」という方針の下で選択教科が設けられ、学校の特色に応じてカリキュラムが組めるようになっている。しかし、新課程では必修教科重視となり、中学校教育としての共通性が高まる。

学習内容については、「確かな学力」の育成のために、国語・社会・数学・理科・外国語で充実が図られている。具体的には、現行課程で削除されたり、上の学年で教えることになったりした内容が戻るなどの変更がある。例えば、数学では「図形の移動」が復活し、「二次方程式の解の公式」「有理数・無理数」「球の表面積・体積」などが高校から中学校に移行、更に「起こりうる場合の数」が中学校から小6に戻る。同様に理科では、高校から指導内容が下りてくる分野や、

図1 新課程での中学校の年間標準授業時数

教科等	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	外国語	道徳	特別活動	選択教科等	総合的な学習の時間	総授業時数
1学年	140（4）	105（3）	140（4）	105（3）	45（1.3）	45（1.3）	105（3）	70（2）	140（4）	35（1）	35（1）	－	50（1.4）	1015（29）
2学年	140（4）	105（3）	105（3）	140（4）	35（1）	35（1）	105（3）	70（2）	140（4）	35（1）	35（1）	－	70（2）	1015（29）
3学年	105（3）	140（4）	140（4）	140（4）	35（1）	35（1）	105（3）	35（1）	140（4）	35（1）	35（1）	－	70（2）	1015（29）
計	385	350	385	385	115	115	315	175	420	105	105	－	190	3045
増減	35	55	70	95	0	0	45	0	105	0	0	-155～-280	-20～-145	105

＊数字は年間標準授業時数。（　）内は週当たりのコマ数
＊文部科学省「中学校学習指導要領」を基に編集部で作成

中学校での指導から小学校での指導に変更になる分野もある。

このような具体的な指導内容の変更に加え、今回の改訂には「小学校との連携」「高等学校との連携」を意識した言葉が盛り込まれている（図2）。各教科における系統性を重視しながら、複数の学年で学ぶ「反復」や、小と中、中と高の接続を重視した指導の工夫がより一層求められているといえるだろう。

ポイント3 数学・理科は09年度から一部を前倒しで導入

中学校では、09年4月から移行措置が始まる。総則、道徳、総合的な学習の時間、特別活動については、一部の例外を除き、基本的に09年度から新課程の規定によることとしている。

数学、理科に関しては、新課程に円滑に移行できるように、09年度から11年度までの移行期間中に、新課程の内容の一部が前倒しで導入される（図3）。それに伴い、順次、授業時数も増加される。ただし、選択教科などの授業時数が削減されるため、総授業時数は変わらない。移行期間中、現行の教科書に記載のない内容については、文部科学省が必要な資料等を作成し、配付することになっている。

高校との接続に関していうと、12年度には数学、理科を中学3年間新課程で学んだ生徒が高校に入学してくることになる。

英語では、中学3年間で語数を現行の900語から1200語に増やすと共に、「聞く・話す・読む・書く」を統合的に行う学習活動を充実させることを明記した。

図2　数学と理科で身に付けるべき力と改訂の要点、具体的事項

	数学	理科
特に重視されている「身に付けるべき力」	◎基礎的・基本的な知識・技能 ◎数学的な思考力・表現力 ◎学ぶ意欲	◎科学的な概念の理解など、基礎的・基本的な知識・技能 ◎科学的な思考力・判断力 ◎理科を学ぶことの意義や有用性の実感
指導にかかわる改訂の要点	◎発達や学年の段階に応じた反復（スパイラル）による指導を充実 ◎国際的な通用性、内容の系統性、小・中・高等学校での学習の円滑な接続等の観点からの指導の充実 ◎「数学的活動」を通し、学ぶことの意義や有用性を実感させる指導の充実	◎「4つの領域（エネルギー、粒子、生命、地球）」を軸として、小・中・高等学校を通じた学習内容の一貫性の確保 ◎国際的な通用性、内容の系統性、小・中・高等学校での学習の円滑な接続などの観点からの指導の充実 ◎科学的な思考力・表現力の育成の観点から、観察・実験の結果を分析し解釈する学習活動、また科学的な概念を使用して考えたり説明したりするなどの学習活動の充実 ◎理科を学ぶことの意義や有用性の実感および科学への関心を高める観点から、日常生活と科学との関連を重視

*中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）」を基に編集部で作成

図3　移行措置期間（09～11年度）の新しい学習内容（抜粋）

「内容の取り扱い」についての変更は省略。詳しい内容は、文部科学省のサイトを参照
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/ikou/index.htm

	数学	理科
第1学年	◎A（2）エ　文字を用いた式による表現や読み取り ◎B（1）イ　平行移動、対称移動、回転移動 （2）ウ　球の表面積と体積 ◎C（1）ア　関数関係の意味 ◎D　資料の活用	◎第1分野（1）イ　（ア）力の働き ◎第2分野（1）ウ　植物の仲間
第2学年	なし	◎第1分野（4）イ　（イ）酸化と還元（ウ）化学変化と熱 ◎第2分野（3）ア　生物と細胞 （3）ウ　動物の仲間 （3）エ　生物の変遷と進化 （4）ウ　日本の気象 ※第2学年は、10年度から追加
第3学年	◎A（3）ウ　解の公式を用いた二次方程式の解法 ◎B（1）エ　相似な図形の面積比と体積比 ◎B（2）　円周角と中心角の関係 ◎C（1）エ　いろいろな事象と関数 ◎D　資料の活用 ※第3学年は、10年度から追加	◎第1分野（5）イ　（ア）仕事とエネルギー （6）ア　（ア）水溶液の電気伝導性 （イ）原子の成り立ちとイオン ◎第2分野（5）イ　遺伝の規則性と遺伝子 （6）イ　（イ）月の運動と見え方 ※11年度からの追加内容は省略

*文部科学省「移行措置の概略（中学校数学・理科）」を基に編集部で作成

座談会

新課程に高校現場はいかに向き合うべきか

高校の新課程は、学習内容の増加や「言語活動の充実」「活用の重視」など、義務教育での改訂とも連動している。新課程は高校現場にどのような影響を与えるのか、実施前に必要な心構えとは何か、4人の先生に話を聞いた。

分厚くなる教科書の内容をどう指導するか

編集部　新課程をどのように評価していますか。

臼田　国語、数学、外国語で共通必履修科目が設定されるなど、全般的に必修化・共通化の流れが強まったと感じています。基礎的な知識は大学入学までにきちんと身に付けさせておくことが重要であり、必修化・共通化の流れは歓迎すべきものと思います。

私の担当教科である理科の生物では、「遺伝」にかかわる単元の内容などに、今まで取り上げられていなかった高度な内容も明記されています。生物の教師にとってはかなり面白く、歯応えのある内容になったのではないでしょうか。教科書も現状より分厚くなるのではないかと聞いています。授業内容は質量共に充実するでしょう。

及川　数学は、共通必履修科目の「数学Ⅰ」を見ると、学習量が1単元分増えたという印象です。内容も高度になりました。3単位の時間の中ですべての内容を指導できるかどうかという不安はあります。ただ、前回までの改訂で内容がかなり減らされてきましたから、私が新任で教えていたころから考えると、指導が大変になるとは思いません。

秋元　国語では、「国語表現」との選択必履修だった「国語総合」が共通必履修科目になりました。表現にはそれを支える知識や技術が必要ですから、「国語総合」が共通必履修となって良かったと思います。

岩手県立盛岡第一高校
及川　満 Oikawa Mitsuru
進路指導主事。数学担当。

また、言語表現のための知識や技能の重要性が強調されていることは評価しています。国語の中でも現代文に関しては勉強しても伸びないとよくいわれますが、決してそうではなく、「要約」のように技術が重要になる領域が少なくありません。国語の技術的な側面をしっかり意識して指導すれば、生徒の国語力は間違いなく伸びると思います。

宮野原　英語では、「英語Ⅰ」と「オーラルコミュニケーションⅠ」が再編され、「コミュニケーション英語Ⅰ」が共通必履修となりました。これは「今まで以上にアウトプットを大切にしなさい」というメッセージだと、私は捉えています。コミュニケーションは外国語教育の必須要素です。相手の考えを理解した上で、自分の意見を的確に伝える力の充実が目標に掲げられたことは評価します。また、英語を使う場面を増やす一方、

特集

新課程のポイントと高校教育への影響

学習すべき単語量も増加しています。

全体的に見て「良いものはすべて取り入れた」改訂に見えます。内容を充実させることは確かによいのですが、一方でクラスサイズを小さくするなど、それを実現させるための条件整備が必要です。その点は、国や教育委員会に期待したいところです。

東京都立日比谷高校
臼田浩一 Usuda Hirokazu
進路指導部長。生物担当。

学力の向上はどの程度期待できるのか

編集部　今回の改訂では、数学・理科を中心に、小・中学校の義務教育段階で学ぶ内容が増えます。高校にとっては追い風のように見えますが、生徒の学力向上はどの程度期待できるとお考えですか。

臼田　中学校の学習内容の充実は、生徒の学力を高めるために必要なことで賛同します。しかし、プラス面だけでなく、マイナス面も慎重に予測しておくことが大切だと思います。

子どもが多かった時代、私が勤務する東京都では、中学校にも物理・化学・生物・地学の各分野専門の教師がいました。ところが、少子化が進んで学校規模が更に小さくなれば、例えば理科担当は物理専門の教師1人で、その先生が第1分野（物理、化学）だけでなく第2分野（生物、地学）まですべて教えるような中学校が増えていくでしょう。授業時数をいくら増やしても、専門教師がいなければ教える内容が偏ってしまう。今でも、本校では中学校時代の学習履歴によって、生徒の習熟度にバラツキが見られます。こうした傾向が更に進むのであれば、対策が必要です。

宮崎県立宮崎大宮高校
宮野原章史 Miyanohara Akihumi
進路指導部長。英語担当。

秋元　鹿児島県でも小規模の中学校では、ある教科の教師が担当教科以外の教科を教えている例があります。そういう状況で、すべての生徒が分厚くなった教科書の内容を習得できるのかという不安はあります。地域による学力差が、今以上に広がるおそれもあります。

もう一つの不安は、塾への依存度が更に高まるのではないかということです。鹿児島県では、かなりの中学生が塾での指導を受けて高校に入学してきます。中学校での学習量が増えることによって、かえって塾への依存度が高まるのであれば、生徒の受け身的な側面を増長させることにもなりかねません。

鹿児島県立鶴丸高校
秋元達也 Akimoto Tatsuya
進路指導課主任。国語担当。

及川　確かに中学校での変化は起こるかもしれません。現行課程に改訂された際にも、学習内容が大幅に削減された影響で、高校の学習についていけない生徒がいました。我々高校教師の使命は、入学してくる生徒の学力がどのように変化しようとも、大学入試を念頭に置いて、生徒の力を一段高いところまで引っ張り上げて送り出すことに変わりはないと思います。大切なことは、教師が常にアンテナを高く張って生徒の変化をつかみ、的確に対応していくことではないでしょうか。

「活用の重視」「言語活動の充実」を各教科でどう指導するのか

編集部　新課程の総則の中で、各教科・科目の指導にあたっては、基礎的な知識・技能の「活用」を図る学習活動の重視や「言語活動の充実」が明記されました。これによって、授業風景は大きく変わるのでしょうか。

秋元　言語活動は、言葉の力を身に付けさせる上で、どの教科でも欠かせない取り組みです。国語科はその中核として特に重要になるでしょう。運用する際には、教師が教育効果を意識して取り組む必要があると思います。「活動」と聞くと、生徒が楽しそうに話をしていれば活動が充実していると錯覚しがちです。効果的な活動にするためには、教師自身が生徒の「学習活動」と教師の「指導目標」を切り分けて考えることが大切ではないでしょうか。討論や発表自体が目的ではなく、それをさせることによってどのような力を身に付けさせたいのか、そのために教師がどのような働きかけをするのかを明確にするのです。

及川　数学では、ある生徒に板書させた解法について、ほかの生徒に意見を求めたり、別解があるかを全体に聞いたりしています。学年が上がるごとにこれらの手法を意図的に仕掛けることは、現在でも多くの先生が取り組んでいます。どの教科でも言語活動に関連する指導は行っている、といえるのではないでしょうか。

また、活用についても、数学の理論を社会的な事象を盛り込みながら説明するといったことは、特に進路多様校では頻繁に行われています。「言語活動の充実」や「活用の重視」については、進学校でもそうした活動を今まで以上に意識することで可能になるのではないでしょうか。

宮野原　英語では、「授業では英語を使っての指導を基本とする」という方針が打ち出されました。私はあくまで「基本とする」という以上、すべてを英語で行う必要はないと捉えていますが、教師も生徒も英語に

図　国語、数学、理科、外国語の改訂ポイント

国語

必履修科目
◎現行の選択必履修から「国語総合」の共通必履修に変更

科目構成
◎「国語表現Ⅰ」及び「国語表現Ⅱ」の内容を再構成し「国語表現」とするとともに、「現代文A」を新設

主な改善事項
◎言語に関する能力を育成する中核を担う教科であることを踏まえ、社会人として、また各教科等における学習に必要な能力を身に付けるため、討論、説明、創作、批評、編集などの言語活動を充実（言語活動例を「内容の取扱い」から「内容」に移し、記述を具体化）
◎我が国の伝統と文化に関する教育を充実するため古典に関する指導を充実

数学

必履修科目
◎現行の選択必履修から「数学Ⅰ」の共通必履修に変更

科目構成
◎現行の７科目構成を、６科目構成に再編。数学の具体的事象への活用を重視した「数学活用」を新設するとともに、「数学C」の内容はその系統性等にも配慮し、他科目へ移行

主な改善事項
◎教科目標で「数学的活動」を一層重視し、「数学的活動」の配慮事項を新たに規定
◎中学校との接続や内容の系統性を一層重視
◎知識・技能を活用する力を育成し、数学のよさを認識させるため、「数学Ⅰ」及び「数学A」の内容に〔課題学習〕を位置付け
◎統計に関する内容を充実し、統計活用力を育成

理科

必履修科目
◎物理、化学、生物、地学のうち３領域以上の科目を履修する場合には、総合科目の履修を不要とし科目履修の柔軟性を向上

科目構成
◎各領域ごとに３単位科目が２科目であったのを、２単位科目と４単位科目に再構成するとともに、「科学と人間生活」及び「理科課題研究」を新設

主な改善事項
◎科学に対する興味・関心を高めるため、人間生活とかかわりの深い内容を扱う「科学と人間生活」を新設
◎探究的な学習を重視する観点から、「物理」、「化学」、「生物」、「地学」に新たに探究活動を導入するとともに、「理科課題研究」を新設
◎中学校との関連を図る観点から、「物理基礎」、「化学基礎」、「生物基礎」、「地学基礎」においては、「エネルギー」、「粒子」、「生命」、「地球」などの科学の基本的な見方や概念を踏まえて内容を構成
◎「物理基礎」、「化学基礎」、「生物基礎」、「地学基礎」においては日常生活や社会との関連を重視、「物理」、「化学」、「生物」、「地学」においては、選択して履修していた項目を必修化し、指導内容を充実

外国語

必履修科目
◎現行の選択必履修から「コミュニケーション英語Ⅰ」の共通必履修に変更

科目構成
◎科目構成を変更し、4技能の統合的かつ総合的な育成を図るコミュニケーション科目、論理的に表現する能力の向上を図る表現科目、会話する能力の向上を図る「英語会話」に再編

主な改善事項
◎指導する語数を充実。コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ及びⅢを履修する場合においては、高等学校で1,800語、中高で3,000語を指導（現行、英語Ⅰ、英語Ⅱ及びリーディングを履修した場合、高校で1,300語、中高で2,200語）
◎生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とすることを明記

＊文部科学省「高等学校各教科等の改訂案のポイント」より抜粋

よる発話の場面は今より増えると思います。その際、教師が意識したいのは、「習得」と「活用」のバランスをどのように取っていくかということです。教師は大学入試で重要な「習得」に力を入れがちですが、「活用」を通して「習得」が定着すると私は考えています。学んだ知識や技能を実際に使ってみたら、自分の理解が不足していたと気づくことは多くあります。「習得」と「活用」のバランスを上手に取ること、そのためには、年間を通じた指導計画の策定がより重要になると思います。

活用の機会が増えれば、授業中、生徒に「任せる」場面が増えていくでしょう。生徒が能動的に活動に参加することで得られる達成感は、学習意欲を高めるためには欠かせません。

各校の教育目標を土台にいかにカリキュラムを組むか

編集部　今回の改訂では、義務教育段階の学習の確実な定着を図るために、標準単位数を超えて単位を設定したり、学校設定科目等を設けることができたり、「はどめ規定」が撤廃されるなど、学校ごとのカリキュラム編成の自由度が高まりました。

臼田　各教科・科目の内容や単位数が変更されたことによって、カリキュラムは複雑になりそうです。特に、理科は他教科に及ぼす影響が大きいと考えています。現行課程で3単位科目の「生物Ⅱ」は、新課程では4単位科目の「生物」にほぼ移行されるので、それだけでも現行から変更しなければなりません。また、必履修となる「基礎を付した科目」を三つ履修（計6単位）した上で4単位科目を選択履修すれば、最低でも10単位になります（注）。各大学が入試科目として「基礎を付した科目」を採用するか否かにより、カリキュラムの編成はかなり変わるでしょう。

秋元　必要最低限の指針だけを示され、上限はなく、自由に組みなさいというのですから、私はこれまで以上に学校の特色が求められるようになると思います。特に新設校や中堅校では、新課程のねらいを生かしつつ、どのように特色を出して生徒募集に結び付けるか、地域との関係を築いていくのかということを、今まで以上に考える必要があるでしょう。

及川　各校の教育目標や従来から持つ指導ノウハウを踏まえて、新課程の趣旨をカリキュラムにいかに反映させていくかが大切です。不易の部分はしっかり守りながら、時代の要請に合ったカリキュラムを組むことが学校に求められているのではないでしょうか。

まず、学習指導要領をしっかり読むことからスタート

編集部　新課程の全面実施は、2013年度からとなります。それまでにどのような準備が必要ですか。

及川　これまでは、新しい教育課程が実施されてからその問題点に気づくということがよくありました。教育課程をよりよく運用するためにも、実施までに時間があるからといって安心するのではなく、「学習指導要領」に目を通して理念を理解し、問題点を洗い出しておくべきだと思います。

宮野原　英語に関しては、教師はこれまで以上に英語力、特にスピーキングの力を高めていくべきでしょう。英語がそれほど上手でなかったとしても、教師自身が勉強しているという姿を生徒に見せることも大切です。教師が自らを高めようと努力している、授業の準備をしっかりしているところを見せることで、生徒に伝わるものもあるのではないでしょうか。

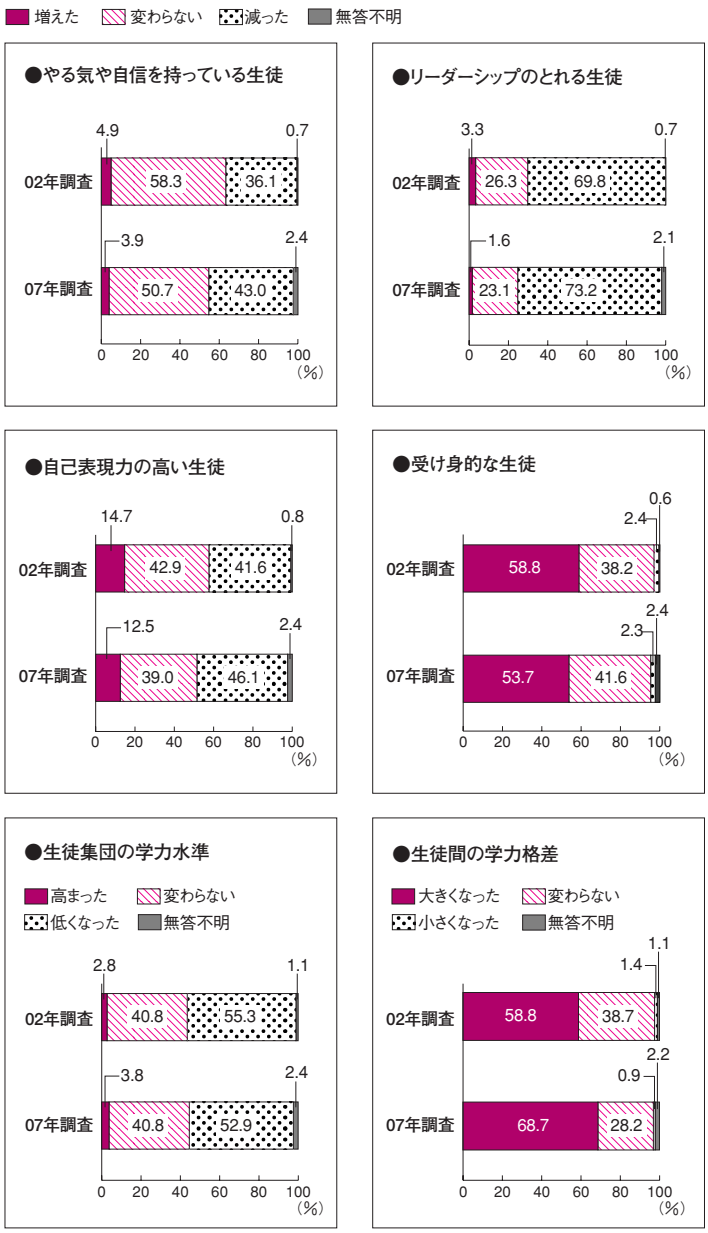
臼田　日本のように国土が狭く資源の少ない国は、人材育成こそが国力充実の鍵（かぎ）です。現代のような不安定な時代には、自ら運命を切り開くチャレンジ精神が必要です。そうした人物を育てるためには、我々教師はリスクを先読みして、見通しを持って教育課程を編成する必要があります。そのためには、教師一人ひとりが「学習指導要領」をしっかり読み込み、教育内容の改善や生徒指導の向上に生かす方策を考えるべきです。今回の改訂を自校の在り方を見直す契機にするという意識が大切ではないでしょうか。

注　必履修科目として「科学と人間生活」（2単位）を履修した場合は「基礎を付した科目」は1つのみ履修すればよい。その場合、履修単位数の合計は4単位となる

「生徒間の学力格差」の拡大を約7割の教師が認識

Benesse教育研究開発センター「第4回学習指導基本調査」より

図 **生徒の変化（中学校教員／経年比較）**
※14項目のうち6項目を抜粋



出典◎『第4回学習指導基本調査』／調査時期◎02年調査:2002年9～10月、07年調査:07年8～9月実施／調査方法◎02年調査:学校通しによる質問紙調査、07年調査:郵送法による質問紙調査／調査対象◎公立中学校の教員02年調査:3,388名、07年調査:2,109名／抽出方法◎02年調査:北海道・岩手県・宮城県・新潟県・石川県・群馬県・東京都・山梨県・愛知県・大阪府・兵庫県・岡山県・福岡県・熊本県、07年調査:全国の公立中学校のリストより、都道府県の教員数に応じた抽出確率で無作為に学校を抽出。＊国語・社会・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員を抽出して分析した

「やる気や自信を持つ生徒」の減少を感じる教師

ここ数年で、生徒の意識や行動に変化は見られるのか。中学校教師に対して尋ねた14項目のうち、特徴の見られる6項目を抜粋した（図）。

「やる気や自信を持っている生徒」が「減った」と答えた教師は、2002年調査の36.1%から07年調査では43.0%と、7ポイント増えた。また、生徒の積極性を表すような項目である「リーダーシップのとれる生徒」と「自己表現力の高い生徒」も「減った」と回答した教師が増えた。中学校教師の目から見て、やる気や自信を失い、消極的な生徒が増えているようだ。

また、「受け身的な生徒」は「増えた」との回答が02年調査、07年調査共に5割以上あった。いかに主体的な生徒を育てていくかは、中学校でも高校同様に大きな課題のようだ。

一人ひとりの意識を把握し個別指導に生かしたい

「生徒集団の学力水準」は、02年調査、07年調査共に変化がなく、「低くなった」の回答がいずれも5割強と多い。一方、「生徒間の学力格差」では、「大きくなった」と回答した割合が、02年調査の58.8%から07年調査では68.7%と10ポイント程度増加し、約7割の教師が学力格差の拡大を認識している。学力水準への認識があまり変わらないのに対して、生徒の間で学力格差が拡大したという認識が広がっている。

「やる気や自信を持っている生徒」が「減った」という回答の増加と併せて考えると、高校では、取り組みを行う際に、生徒一人ひとりの意識をしっかり把握することも大切だ。生徒個別への言葉かけなど、きめ細かな指導によって生徒の意欲を高め、取り組みをより効果的なものとしたい。

中学校の現状は
http://benesse.jp/berd/
または ベネッセ　研究 で 検索
Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトをご覧ください
→ HOME ＞情報誌ライブラリ（中学校向け）

福井県立 **美方高校**

取り組みの効果的な導入と改善

「年度初めに教師全員で過去の実績を振り返り、
『あのころに戻してはならない』と
一人ひとりの胸に刻んでいます」

▶▶▶ P.18

指導変革の軌跡

そのとき教師は、そして生徒は
どう変わったか

東京都立 **小平西高校**

達成体験を活用した学校改革

「『私はできる』というメッセージの共有化が、
教師全員が同じ方向に進める要因です」

▶▶▶ P.26

千葉県立 **千葉東高校**

柔軟性のある進路指導の導入

「教師が協力して生徒一人ひとりを
支えるようになってから、生徒は安心して
学習に取り組んでいるようです」

▶▶▶ P.22

福井県立
美方高校

取り組みの効果的な導入と改善

改革精神の継承と地域の支援が教師の改革への熱意を支える

◎「明・強・清」を校訓とし、国際的視野を持ち、郷土を愛し、地域社会を担う人材の育成を目指す。地域との関係が密接で、地域の要望により、2005年度に連携型の中高一貫教育を始めた。部活動も活発で、07年度はボート部や陸上部、剣道部がインターハイ出場（ボート部は優勝）の実績を上げている。

設立
1969（昭和44）年

形態
全日制／普通科・生活情報科・食物科／共学

生徒数
1学年約180名

08年度進路実績
国公立大は、京都大、大阪大、福井大、金沢大、富山大、名古屋工業大、滋賀医科大、福井県立大などに38名が合格。私立大は、駒澤大、東海大、東洋大、日本大、早稲田大、金沢工業大、立命館大、近畿大、関西学院大などに延べ70名が合格。

住所
〒919-1395
福井県三方上中郡若狭町気山114

電話
0770-45-0793

Web Site
http://www.mikata-h.ed.jp/

実践のポイント

1. 教師全員がスタディーサポート検討会に参加し、生徒の課題を洗い出す
2. 進路関係職員連絡会によって、教職員の目線を合わせる
3. 地域との密接な関係を生かし、連携型中高一貫教育にスムーズに移行

地域の学校として信頼を取り戻す

20年前、福井県立美方高校は開校以来の低迷にあえいでいた。同校のある三方上中郡若狭町（2005年に三方郡三方町と遠敷（おにゅう）郡上中町が合併して誕生）は、福井県南西部に位置する人口約1万7000人の町だ。同校は三方郡（当時）唯一の公立高校として1969年に設立された。それまで地域には高校がなく、隣接する市まで通っていた。通学に不便ということもあり、地域の高校進学率は他地域に比べて低く、地域が行政に働きかけて美方高校が設立されたという経緯がある。同校は県立ながら、地域の意識としては「町立・郡立」であり、地域の熱意に支えられた「おらが学校」だった。

しかし、創立から十数年が経過したころから進学実績が低迷し始め、成績上位の中学生は近隣高校に進学するようになった。次第に、同校の生徒の問題行動が目に余るようになり、地域の信頼を失っていったという。

地域からの信頼を回復するため、同校が改革に乗り出したのは90年代初めだ。特進クラスの設置を皮切りに、全教師体制による小論文・面接指導の実施、新入生宿泊研修の導入、中学校との懇談会などを次々と導入。一連の施策により進学実績は上昇し、徐々に地域の信頼を回復していった。かつて2割以下だったPTA総会の

出席率は6割強まで上昇し、部活動ごとに組織されていた後援会は学校全体を支援する組織へと発展した。改革の経緯と成果は、本誌02年度4月号で取り上げ、大きな反響を呼んだ（注）。

教師全員参加の手厚い指導が進学実績の好調を支える

あれから6年。進学実績は堅調に推移している（図1）。05年度には地元の三方中学校・美浜中学校との間で連携型の中高一貫教育が始まり、地域とのつながりは更に密になった。新入生合宿、中学校との交流行事などは、今も同校の取り組みの核として続いている。

改革でいったんは上昇気流に乗った学校でも、ときが経つにつれ、取り組みが形骸化する場合が少なくない。同校は、改革当初の実績をどのように維持しているのだろうか。進路指導部長の上塚直樹先生は、「大規模校にはできない手厚い指導が本校の強み。教師が徹底的に生徒に手をかけていることが結果に表れ、地域の信頼へとつながっています」と話す。

同校では、学年を問わず全教師が生徒の情報を共有し、指導にあたる。生徒一人ひとりの成績や志望校、受験科目などを教師全員が把握した上で、科目ごとに担当教師を決めて個別に指導している。推薦入試や就職試験対策のための小論文指導・面接指導も、学年や教科を問わず全教師が携わる。これらが大学進学実績や就職実績の好結果に結び付いている。

04年度には教師全員参加のスタディーサポート検討会を始めた。「03年度に生徒把握のためにスタディーサポートを導入しましたが、検証や事後指導は必ずしも十分ではありませんでした。教師自らがデータを分析し、取り組みの改善につなげる必要がありました」と、進路指導部副部長の山口秀輝先生は導入の背景を話す。

スタディーサポート検討会は、5月と10月の年2回実施。第1回は、スタディーサポートを全学年で行うため、検討会にも3学年すべての教師が参加する。第2回のスタディーサポートは1・2年生のみ実施するが、検討会には3年生の全教科担当と進路指導部員も参加する。つまり、2回ともほぼすべての教師が参加する。

3学年担任の丸谷寛先生は、「すべての教師が全学年にかかわる可能性がある以上、他学年の生徒の学力や学習状況、希望進路などの情報を共有しておくことは重要です」と強調する。

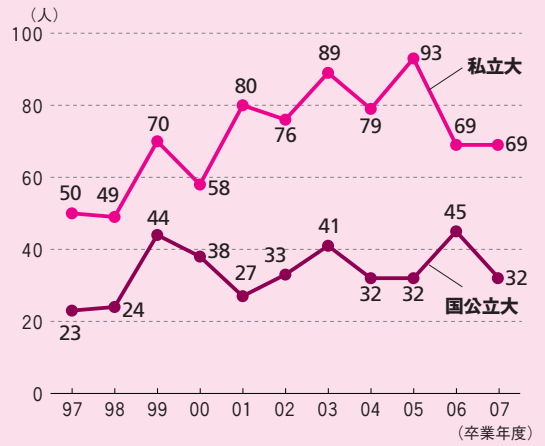
福井県立美方高校
上塚直樹 Uetsuka Naoki
教職歴34年。同校に赴任して3年目。進路指導部長。「自分の持っているすべての力を出し切って生徒の指導にあたりたい」

福井県立美方高校
山口秀輝 Yamaguchi Hideki
教職歴19年。同校に赴任して9年目。進路指導部副部長。「生徒と何でも言い合える関係をつくり、進路希望を実現させていきたい」

福井県立美方高校
村古崇徳 Murako Takanori
教職歴9年。同校に赴任して6年目。進路指導部。「生徒の心に伝わるような言葉を投げかけていきたい」

福井県立美方高校
丸谷 寛 Marutani Yutaka
教職歴12年。同校に赴任して9年目。進路指導部。「当たり前のことを当たり前にできる生徒を育てていきたい」

図1 現役生の進路実績の推移



スタディーサポート検討会で取り組みを見直し続ける

検討会の第1部は全体会で、各学年の所属する進路指導部の教師がスタディーサポートの分

注　バックナンバーはBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）

析結果を報告し、質疑応答を行う（図2）。第2部は学年ごとに分科会を開き、具体的な対策を練る。第1部は1時間ほどで終わるが、第2部は具体的な対策を立てるまで続ける。学年の判断で実施できる対策は即実行し、学校としての判断が必要な対策は職員会議を経て実施する。

検討会を経て実施した取り組みは多い。例えば、07年度の3年生では、スタディーサポート分析の結果、例年より家庭学習時間が少ないとわかり、学習時間記録のノートを作成することにした。それまでプリントで行っていたが、学習時間をノートに記録することで保存性を高め、生徒が長期的に自らの生活を振り返られるようにした。

新入生宿泊研修に学習合宿の要素を取り入れたのも、スタディーサポートで家庭学習習慣が定着していないとわかったからだ。合宿のねらいはクラスづくり、仲間づくりにあったが、04年度からは学習方法を指導する時間を設けた。国語・数学の予習→授業→復習という流れを実際に体験させ、家庭学習習慣の確立につなげたいとしている。

家庭学習習慣の定着に利用している「自主学習ノート」も、検討会発の取り組みだ。学習する教科や内容を生徒自身が決めて自由に活用するノートで、丸谷先生の学級で実施していた活動を、検討会の議論を経て全校に広げた。そのほか、3年生の学習合宿の導入、長期休業中の課外活動の改善など、検討会を経て実行に移された取り組みは多数ある。スタディーサポートで課題を把握し、それを今ある取り組みの見直しに役立て、取り組みの形骸化を防ぐ。こうした不断の改善が、進学実績を維持し続ける秘訣といえそうだ。

図2　スタディーサポート検討会

第1回　スタディーサポート実施（4月中旬）
対象は1～3年生→第1回検討会（5月中旬）

第2回　スタディーサポート実施（9月中旬）
対象は1・2年生→第2回検討会（10月中旬）

検討会の流れ

第1部（約1時間）

校長挨拶
↓
スタディーサポート分析報告
各学年の進路指導部員が分析・報告を行う
↓
質疑応答

第2部

各学年に分かれての分科会
課題を受けて改善策を審議、2～3時間

学校全体の判断が必要な対策は職員会議で議論
↓
取り組みに反映
3年生の学習指導など

学年単位で判断できる対策は即実行
↓
取り組みに反映
家庭学習記録ノート、自主学習ノートなど

全員参加の連絡会で改革の精神を継承

改革の精神を意識的に継承していることも、取り組みの形骸化を防ぐ重要な要素だ。毎年、新学期直前に行う「進路関係職員連絡会」では、転任者を含めて教師全員が集まり、午前中いっぱいをかけて、進路行事や模試、課外の計画、学校行事や部活動の遠征スケジュールの確認や調整などを行う。指導の目線合わせと共に、低迷期の苦難の日々を振り返ることによって、改革の精神を受け継ごうとしている。

「ここ6年間で、本校に長く在籍していた教師の大半が異動しました。新しく赴任した教師に、改革時の様子を伝える必要があると考えました」と上塚先生は話す。

連絡会では過去十数年分の進路実績を見せる。国公立大合格者数は、10年前まで毎年20人前後だったが、99年度以降はほぼ30～40人を維持している。同校の復活を象徴するデータを皆で見て、「あのころに戻してはならない」という思いを教師一人ひとりの胸に刻み込むのである。

また、進路関係職員連絡会やスタディーサポ

部活動アンケートで加入率を高める

同校の部活動の加入率は、90年代初めは35%程度だったが、6年前には80%前後まで増えた。現在は90%以上の生徒が部活動に参加し、複数の部に在籍する生徒も増えている。加入率が高い理由は、1つには中学校との交流会で部活動の見学を積極的に展開していること。もう1つは、新入生宿泊研修での呼びかけがある。オリエンテーションで部活動参加の意義を説き、生徒にアンケートを取り、入部を希望する部と選んだ理由、目標や抱負などを記入させる。用紙は該当する部活動の顧問に渡し、後日、顧問自身が直接生徒に呼びかけたり、先輩から誘いの言葉をかけたりする。無記入の生徒に対しては、担任が声をかけ、部への加入を勧めることもある。

選んだ理由を書かせることによって、生徒自身が実際に部活動をしている様子をイメージしたり、目標を文字化することによって活動に対する意欲を喚起したりする効果も期待できる。いかに生徒の気持ちを高めるかということは、学習のみならず、部活動の活性化においても欠かせない要素のようだ。

ート検討会など、全教師で共有する「場」が多いことも、思いを継承しやすい環境になっている。丸谷先生は次のように話す。

「『教師全員ですべての生徒を見る』という思いが、低迷期を乗り切れたポイントの一つだと思います。新任や転任してきた先生方は、全員参加の連絡会や検討会、全員で取り組む3年生への個別指導の状況などを見て、その思いを実感し、意識を強めるようです」

地域の熱い期待が教師の意識を支える

教師の意欲を支える重要な要素の一つは、何といっても地域の期待だ。地域の熱望によって設立された同校には、一口1000円で参加できる「美方高校後援会」がある。会員は現在約4000人。会員数は減少傾向だが、地域的には敦賀市や小浜市などにまで広がっている。改革当時に発刊が始まった後援会会報誌『泉ン原（いずんばら）』（年1回発行）は、08年度で10号を迎えた。「地域あっての美方高校」という意識が、教師の間に浸透しているのである。

地域連携はここ数年で新しい展開が見られた。5年前に導入した「先輩と語る会」は、10人ほどの卒業生を招き、高校時代の思い出や現在の仕事などを在校生に語ってもらう講演会だ。同校では卒業30年目に同窓会を行うため、その機会を利用して開いている。山口先生は、「卒業生は生徒にとって先輩というだけでなく、同級生の保護者であることもよくあります。より身近な存在として、言葉の一つひとつが生徒の心に響いています」と話す。

05年度に始まった中高一貫教育は、普通科3クラスのうち2クラスを連携クラスとする。「スムーズに連携できたのも、中学校との交流事業を継続的に行ってきたからです」と、上塚先生は評価する。08年度には中高一貫教育の1期生が高1生となった。当面の課題は1期生が確実に実績を出すことだが、今のところ学力面は例年より厳しい状況にある。

進路指導部の村古崇徳先生は、「学力検査を受けていないことが原因と考えられます。今後は、数学の課外補習の充実、英語の新規教材の導入等の改善策を検討しています」と総括する。試行錯誤を重ねながら、既に課題解決に向けた一歩を踏み出しているところは同校らしいといえる。

ここ6年で、美方高校はさまざまな取り組みを導入・改善してきた。一方、廃止・縮小した取り組みは一つもない。教師の多忙感は増しているが、当面取り組みを縮小する予定はない。生徒にとって必要な取り組みばかりという認識があるからだ。上塚先生は、「増えた取り組みは、すべて生徒を対象としたものです。生徒の喜ぶ顔を見れば忙しさも報われます」と話す。

すべては生徒のため――。その思いこそが、教師の意欲を支える源泉なのだろう。

変革の明日を目指して

改革の精神を次代に伝えていく責任を感じる

3学年担任 **丸谷 寛**

◎私が本校に赴任したのは9年前、教師になって4年目でした。初めて特進コースの担任を任されたときには、プレッシャーで緊張していたのを覚えています。

当時の本校は落ち着きを取り戻し、進路実績が上向き始めたころでした。私自身は大変な時期を直接体験しませんでしたが、先輩の先生方の体験を聞く機会は何度もありました。当時の校長先生も、私たちをよく酒の席に誘っては、学校の成り立ちから低迷期、改革の経緯まで語り聞かせてくれました。教師としての心構えや生徒指導のノウハウも、そういう場を通して伝授されたように思います。

今は、事務の仕事などが増えて、同僚とゆっくり雑談したりお酒を飲みながら語り合ったりする機会は少なくなってしまいました。進路関係職員連絡会のような公的な取り組みの中でしか伝えられなくなったのは、時代の流れかもしれません。

担任としては特進コースを二周り経験し、進路指導部では毎年スタディーサポートの分析を担当しています。これからは、私が9年間で培ったノウハウを若い世代に伝えていこうと思います。また、改革当時を直接知る先生方の大半が他校に異動した今、改革の精神を次代に伝えることも、在校歴の長い私の役目と考えています。

先生方とコミュニケーションを密にし、互いのノウハウを共有できる関係を築いていきたいと思います。

千葉県立
千葉東高校

柔軟性のある進路指導の導入

「柔構造」が学校の活性化を生み生徒との信頼関係を構築する

◎「知育・徳育・体育」のバランスの取れた教育を志す伝統校。生徒のほぼ全員が大学進学を希望。近接する千葉大との高大連携を実施するほか、2007年度に2学期制、08年度に単位制を導入した。部活動も盛んで、生徒の加入率は92%に達する。

設立
1941（昭和16）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約320名

08年度進路実績
国公立大には千葉大49名、筑波大8名、東京大4名、東京工業大4名、お茶の水大4名など138名が合格。私立大には青山学院大、慶應義塾大、早稲田大、上智大、立教大、明治大、中央大など延べ825名が合格。

住所
〒263-0021
千葉県千葉市稲毛区轟町1-18-52

電話
043-251-9221

Web Site
http://www.chiba-c.ed.jp/chibahigashi-h/

実践のポイント

1 学年団が中心となり進路指導を展開

2 「目線合わせ情報」を時期ごとに提供し、面談を充実させる

3 夏期講習の予定表を早めに提示し、学校を学習の場とさせる

教師の意識を変え わずか数か月で成果を上げる

「教師の進路に対する問題意識がばらばらだったことが、一番の問題だったと思います」

千葉県立千葉東高校の進路指導主事・鈴木宏先生は、以前の進路指導をそう振り返る。

同校は、2003年10月、千葉県教育委員会から進学指導重点校に指定されたことを機に、進路指導を抜本的に見直した。その成果は、教師の予想を大きく超えるものだった。02年度から04年度卒業生の進学実績の推移を見ると、国公立大の現役合格者数は59人→78人→106人、現役進学率も54%→58%→69%と、毎年伸びている（図1）。

同校にとって、この進学実績の向上は「復活」といえるものだった。かつては現在と同じくらいの進学実績を上げていた。しかし、平成に入ってから国公立大合格者数の減少が続き、浪人する生徒が増えていった。同校の進路指導は担任が個々に取り組むものを中心としていたが、学区内の私立校が台頭して入学者層が変化したために、従来通りの進路指導のスタイルが合わなくなっていったのだ。

ところが、教師の問題意識は集約されていなかった。進学実績の総数は落ち込んでいたが、難関大には依然として一定数が合格していたからだ。異動によって進学校での進路指導を初め

て経験するという教師が増えたことも、問題意識がまとまりにくい要因の一つだった。

そうした同校にとって、進学指導重点校の指定は大きな転機となった。手探りの中、「他校のよい取り組みを参考にしよう。本校に合わせて取り入れていけばよい」という方針を取り、改革を進めた。後述する「新旧担任会」「ポジティブ制度」などは、他校を参考にした取り組みだ。そして、以前から課題を感じていた教師たちが「重点校になったのだから」と改善を呼びかけ、校内全体の意識を高めていったことが、一番の大きな変化だった。

教師の意識変革は、03年度卒業生の進学実績にも表れた。具体的な活動を始めたのは04年度だが、03年度の3年生に対しても、面談や集会を通して意識付けを強化した。その結果、わずか数か月間の指導にもかかわらず、進学実績が伸びたのだ。

当時から進路指導を担当する山口久美先生は、『真剣に学ぼうとする生徒達なので、少しアドバイスをするだけで成果につながる』と実感し、04年度からの取り組みに弾みがつきました」と話す。

千葉県立千葉東高校
鈴木 宏 Suzuki Hiroshi
教職歴25年。同校に赴任して12年目。進路指導主事。「生徒に『わかる』ことの喜びを伝えるために、最大限の努力をしたい」

千葉県立千葉東高校
松本 孝 Matsumoto Takashi
教職歴27年。同校に赴任して5年目。総務部。「一人ひとりの生徒の夢を実現するための手助けをしたい」

千葉県立千葉東高校
山口久美 Yamaguchi Kumi
教職歴23年。同校に赴任して8年目。進路指導部。「生徒の成長こそが原動力。成長をもたらすために、今、何をすべきかを考えています」

柱の設定と柔軟性が取り組みを活性化させる

同校の取り組みの特徴は、進路指導の柱を「面談」と「実力試験」とし、このほかの取り組みは年度によって変えていることだ。鈴木先生はその仕組みを「柔構造」と呼ぶ。

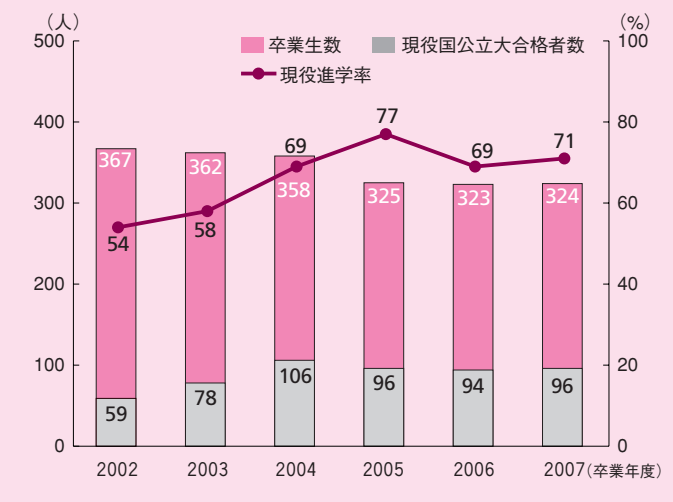
「年度ごとに生徒の成績や課題、気質などは異なります。それを踏まえた指導が大切であると考え、指導内容を柔軟に変えるのが、本校の取り組みの特徴です」

生徒の実態を熟知する学年団が進路指導の中心となり、進路指導部はあくまでもサポート役に徹する。具体的な活動は、毎年、学年団と進路指導部とが随時打ち合わせをして決める。進路指導部が過去に行ったさまざまな行事からプランを提示し、学年団が生徒の特徴を踏まえて取捨選択するという流れだ。例えば、医学部志望の生徒が多い年度には、進路指導部の提案によって、保護者向けの医学部説明会を開催したこともある。

「柔構造」は取り組みの形骸化を防ぐという利点もある。教師の間に、「毎年行っているからする」ではなく、「必要だから行う」という意識が生まれるからだ。教師が目の前の生徒の姿を通して指導内容を検討するようになり、「このような行事をしたい」「このような資料はないか」など、学年団から進路指導部への要望が格段に増えたという。

年度によって指導が異なる場合、進学実績にばらつきが生じるおそれがある。その対策とし

図1 現役国公立大合格者数、現役進学率の推移



て、「新旧担任会」を実施している。これは、毎年4月、前年度と新年度の3学年担任が一堂に会して情報を共有する場だ。進路指導部が前年度の担任にアンケートを取り、効果の高かった取り組みや反省点、受験動向などを事前にまとめ、それらを基に話し合う。新年度の担任は、会議で得た情報を指導プラン作成の参考にする。この流れの中で時期ごとの悩みや心構えなどを共有する。これにより、初めて3年生を受け持つ教師も安心して指導にあたれるのだ。

図2　進路指導部作成「目線合わせ情報（夏前）」（一部抜粋）

実力試験についてお願いしたいこと

実力試験の結果が極端に上がった、ならびに下がった生徒の一覧を出しました。下がった生徒については、必ずその理由を確かめると同時に、今後の計画を確認してください。部活動を理由にする生徒には、「部活動の顧問や同級生に対して失礼だ」といって甘えをなくすと同時に、連帯感を強調してください。

面談で触れてほしい内容

◎進学希望先大学が6月に大きく変わってしまった生徒
理系の「文転」以外にも、国公立型から私立型に変わった生徒については、その気持ちや将来像を語らせてください。

◎進学希望大学の並びがおかしい生徒
第3希望に東大があったり、私大の希望順がおかしかったりする生徒は、なぜその順番で記入したのかを確認してください。

◎各科目へのアドバイス
この夏は、「英語を特に頑張って」というアドバイスよりも、より具体的なアドバイスを欲しがっています。英語のどの分野（例えば、文法や長文読解）について頑張るのかといったことを、生徒自身に宣言させたり、考えさせたりしてください。生徒自身に自覚のない場合は、各教科の先生にアドバイスをもらいに行かせてください。

◎この時期に既にA・B判定が出ている生徒の指導を注意してください
判定がよいことで気が抜けたり、ぬるま湯につかったような夏を送ってしまう可能性があります。もう1ランク上の生徒が志望変更で降りてくることを意識させてください。

「目線合わせ情報」で時期に応じた面談のポイントを共有

取り組みの柱の一つである面談には、「柔構造」の考え方を取り入れた。改革前から、3年生では年3回の生徒面談と年2回の保護者面談を実施していた。しかし、進路についての踏み込んだ話し合いにならず、志望校の確認や一般的な受験の心得指導にとどまることが多かった。通り一遍の面談になっていた最大の要因は、教師が効果的な面談の進め方を知らなかったことにあった。そこで、進路指導部は、各時期に応じた面談のポイントを「目線合わせ情報」としてプリントにまとめ、担任に配付した（**図2**）。07年度に3学年主任を務めた松本孝先生は、次のように話す。

「『目線合わせ情報』によって、どのようにすれば生徒の本音や悩みに迫り、指導の効果を上げられるかがわかり、どの担任も生徒の実態に即した面談をできるようになりました」

例えば、資料では志望校の順位に関して、難易度と志望順位に整合性が取れていないときは、そこに生徒の真意が隠れている場合が多いと指摘している。

「第3志望の欄に『東京大』と、第1、2志望よりも難易度の高い大学を書いてくる生徒がたまにいます。自信のなさや気恥ずかしさが理由だと思います。以前なら、本当は東京大に入りたいのだなと感じても踏み込んだ指導はしませんでした。でも今では、志望順位を改めて確認し、本来の第1志望を目標にして頑張らせるようにしています」（松本先生）

「気になる生徒がいたら、随時、面談を行うという考え方が、自然と校内に広まりました。今では平均して生徒1人当たり年間5、6回は面談をしています」（山口先生）

二つめの柱は実力試験だ。同校では、3年生対象の校内実力テストを全5回実施している。更に、任意で校外模試を5回受けるように促し、合計で年10回を受験するよう指導する。生徒に自分の学力を把握させると共に、指導に必要なデータをきちんと蓄積するためだ。また、自分の弱点を把握することで、今自分が何をやるべきかを具体的にし、生徒を精神的に落ち着かせるねらいもある。

校内実力テストの学年全体および学級ごとのデータは進路指導部と学年団で共有し、補習の実施などを検討する材料にしている。進路指導部は、担任用に「目線合わせ情報」として実力試験の結果分析法や生徒への指導法をまとめ、生徒の面談に生かしてもらっている。また、模試の合格判定欄を見て生徒の志望校を把握し、適宜、その大学に入った卒業生を紹介するとい

った活用もしている。

補習計画を前倒しで提示し学校を安心して学べる場に

面談などの「教師から生徒に近付いていく取り組み」を充実させる一方、「生徒から教師に近付いてもらう仕掛け」も強化した。

その一つは補習の組織化だ。以前は放課後や夏期の補習は個々の教師に任せていたため、時間が重なったり内容が重複したりと効率的ではなかった。そこで、進路指導部を中心に教師が討議し、時間や内容を調整する組織化を進めた。

特に、生徒に好評なのは夏期補習だ。組織化前は夏期補習の計画が出そろうのは7月で、5月ごろにある予備校の夏期講習の募集が終了してから発表していた。そこで、予備校の募集終了前に夏期補習の時間割を作成して生徒に配付したところ、例年に比べ、参加する生徒が格段に増えた。生徒からは「予備校よりも学校の方が安心して学習できる」という意見が多く聞かれたという。進路希望を把握し、生徒のことを考えた指導が、学校への信頼を築いたのだ。

大学入試がピークの2月にも、多くの3年生が学校で自習をするようになった。「学習環境に満足し、高校が自分の居場所と考える生徒が増えた表れだと思います」と、松本先生は喜ぶ。

04年度に始めた「ポジティブ制度」の成果も、生徒と学校の距離が縮まったことを表している。学校で行う進路指導の活動に大学生になってからも協力できるという卒業生に、あらかじめ登録してもらうシステムだ。依頼する活動は、在校生へのアドバイスや大学見学の際の案内役など。8割以上の卒業生が登録に快く応じ、総数は700人を超えた。生徒が愛校心を持って卒業したことがうかがえる。

「先日、卒業生が大学に入ってからの友人との会話を報告してくれました。平日の放課後はもちろん土曜日も長期休業中も学校でずっと勉強していたことを話したら、『そんなに学校にいたなんて』と不思議がられたそうです。そうした報告からも、取り組みが着実に成果に結び付いていると感じました」と、鈴木先生は話す。

一連の指導の強化によって、同校はかつての進学実績を取り戻した。更なる一歩を踏み出すための課題は1、2年生への指導だ。受験に向けて2年生の夏以降の指導が重要であると認識しているが、現在は夏休みの大学見学の報告書をまとめさせる程度の活動しか行えていない。この時期から学ぶ意欲を高めさせ、3年生への指導にスムーズにつなげたい考えだ。

「教師の間には『いかにして生徒の潜在能力を引き出すか』という意識が確実に根付きました。今後は『受験があるから勉強する』という生徒の意識を変えることに重点を移し、教科指導をより充実させると共に、進路、学年、教科の連携を広げたいと思います」と、鈴木先生は意欲を語った。

変革の明日を目指して

たくさんの教師で1人の生徒を包み込み安心して学習させたい

進路指導部 **山口久美**

◎本校には2001年度に赴任し、進路指導部に配属されました。03年度に県の進学指導重点校の指定を受けてから、各地の高校の進路指導に関する事例を調べ、校務分掌ごとに手分けをして、十数校は視察しました。

一連の改革の中でも効果が大きいと感じるのは、面談の充実です。進路指導部が作成する「目線合わせ情報」を活用すると共に、教科担当や部活顧問の先生方からの情報も面談に生かすようになりました。今では、進路指導には、実力テストのデータだけではなく、友人関係や部活動、家庭の事情といったさまざまな要素を踏まえた指導が必要であることを実感しています。タイムリーな指導が重要と考え、少しでも気になる生徒がいれば、すぐに声をかけるように心がけています。掃除の合間に短時間で済ませることもあれば、放課後にじっくり話し合うこともあります。あまり形式にとらわれずに取り組むことが、生徒と向き合う上では大切だと考えています。

多くの教師が協力して一人ひとりの生徒を支えるようになってから、生徒も安心して学習に取り組んでいる様子です。進路指導室に面した廊下には、資料を目立つように置いて入室を促すなど、教師と生徒との距離を縮める工夫も徐々に効果が出ています。受験後、学校に参考書を寄付する生徒が増えたことには、「『後輩達よ頑張れ！』という激励の気持ちと共に、自分だけではなく、他人を思いやる気持ちを持って次のステップへと進んでいくんだな」と、取り組みの成果以上のものを実感しています。

東京都立
小平西高校

達成体験を活用した学校改革

「私はできる」を軸とした「小西スタイル」で全国一の進路多様校を目指す

◎「創造・協調・健康」を教育目標として、「生徒の多様な進路希望の実現がかなう学校」を目指す。2006年度から学校改革に取り組み、「小西スタイル」と呼ばれるキャリアプランを構築中。部活動では創部２年目の自転車競技部が国体出場を果たしたほか、ラグビー部や野球部などの躍進が期待されている。

設立
1976（昭和51）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約240名

08年度進路実績
４年制大は、亜細亜大、駿河台大、中央大、帝京大、東京経済大などに69名が進学。短大には17名、専門学校には57名が進学。就職は44名、浪人などの未定は27名。卒業生計214名。

住所
〒187-0032
東京都小平市小川町1-502-95

電話
042-345-1411

Web Site
http://www.kodairanishi-h.metro.tokyo.jp/

実践のポイント

1 生活指導の徹底で、生徒の関心が学校に向かう

2 生徒が自己効力感を持てるように「私はできる」の観点で取り組みを見直す

3 数値目標の設定で、教師も「やればできる」が実感できる

環境変化の荒波の中で底なしの低迷に落ち込む

東京都立小平西高校は、かつては東京大に合格者を出すなど、地域の期待を担う進学校の一つだった。しかし、入試制度の変化や旧学区の最西端に位置することもあり、低迷状態が長らく続いた。遅刻や茶髪は常態化し、問題行動も多かった。退学者は増え、３年生になるまでに約１クラス分の生徒が学校を去った。生徒は自分の将来に立ち向かうことができず、現状に甘んじた安易な進路選択をしがちだった。その結果、フリーターが３割という状況が続いていた。

２００６年度に赴任した進藤周治校長は、「初めて本校を訪れたときは、寂しい状態でした。校舎は暗く、部活動はちらほら。学校らしい活気やパワーを感じることができませんでした」と、当時の印象を語る。更に、始業式に臨んで驚いた。進藤校長が演壇に立っても、生徒は一向に話をやめない。後ろを向いたり携帯電話でメールをしていたり。たまりかねて校長が一喝して、ようやく始業式は始まった。

「先生方には、一生懸命に指導をしても、一向に改善しない状況に対する疲労感、徒労感があったのでしょう。教師が元気でなければ、生徒は元気にならない。早急に改革に着手し、先生たちが元気になれる学校をつくる必要性を痛感しました」（進藤校長）

管理職の一言が教師の行動をあと押しした

改革に先立ち、進藤校長は自分たち管理職が徹底的に現場を支援すると、教師に伝えた。それまでも教師は学校を変えるべく努力を重ねてきたが、学校全体の動きにつながらずにいた。

東京都立小平西高校校長
進藤周治 Shindo Shuji
教職歴36年。同校に赴任して3年目。「『やればできる』という思いを、生徒に伝えていきたい」

東京都立小平西高校
人見 茂 Hitomi Shigeru
教職歴29年。同校に赴任して9年目。進路指導主任。「いくつになっても理想を高く持ち続けたい」

東京都立小平西高校
森川雅彦 Morikawa Masahiko
教職歴26年。同校に赴任して7年目。1学年主任。「いつもクリエイティブであり続けたい」

東京都立小平西高校
石井裕己 Ishii Hiroshi
教職歴20年。同校に赴任して4年目。生活指導主任。「モットーは『常に前進あるのみ』」

東京都立小平西高校
菱田 新 Hishida Arata
教職歴13年。同校に赴任して6年目。2学年主任。「生徒には、輝く人生を送るためのベースを高校生活の中で築いてほしい」

そんな折、新たに赴任した校長から発せられた一言は、教師に安堵感と期待感を抱かせた。進路指導主任の人見茂先生は、そのときの気持ちを次のように振り返る。

「進藤校長と最初に面接をしたときに『我々ははしごを外さない』と言われたことが、何よりも心強く感じました。現場の教師が最も危惧するのは、自分の行動がだれにも支持されず、孤立することです。管理職が『私たちが責任を取る』と明言してくれ、心おきなく目の前の生徒と向き合えるようになりました」

進藤校長と磯村元信前副校長の2人は、4月から登校時に校門に立った。生活指導を徹底させると共に、教師や生徒に学校を変えていこうとする意思を伝えようとしたのだ。特に課題のある生徒は、保護者と一緒に校長室に来てもらい、個別に指導した。

「以前は進路指導も生活指導も学年・担任が負う部分が大きく、しかも生徒や保護者の理解をなかなか得られずに苦しんでいました。管理職が前面に出て学校の考えを直接伝えることによって、反抗的な生徒も、理不尽な苦情を寄せる保護者も理解してくれました」（進藤校長）

反対意見にも耳を傾け職員会議で共通理解を得る

同校は生活指導の徹底と同時に、中長期計画を策定した。その論拠としたのは、04年ごろに当時の副校長が教師全員に自校の課題を聞いた調査結果だ。そこには課題として、①学力向上に向けた教育課程の在り方、②生活指導の厳格化と統一化、③3年間の計画的で統一された進路指導が挙げられていた。進藤校長と磯村前副校長が課題に感じていたことと同じ内容を、調査結果は語っていた。

「私たちはこの3点を改革の基点にしました。これから進める改革は、赴任したばかりの管理職が校内の事情も知らずに進めようとしているのではない。あくまで現場の先生の課題認識に基づく改革であると伝え、先生方の協力を得ようと考えたのです」

06年5月、進藤校長は小平西高校の将来像を描くために将来構想会議を立ち上げ、校内の有志を募った。その呼びかけに、若手を中心とした10人ほどの教師が集結。1学期後半から夏休みにかけて、連日、磯村前副校長を中心に議論を重ね、学校改革の全体像を形づくっていった。

もちろん、議論がいつも滞りなく進んだわけではない。メンバーの1人だった2学年主任の菱田新先生は、「当初は将来構想会議が新しい企画を職員会議に提案しても、反対されて、実現しないことがありました」と話す。しかし、反対意見も含め、いろいろな先生の意見を聞きながら企画を練り上げ、二度、三度と職員会議を回す中で、次第に反対意見は少なくなった。

むやみに反対意見を封じるのではなく、その意見にも耳を傾け、根気強く議論を進めることが、合意形成の上で重要だった。

「私はできる」の観点で校内の取り組みを見直す

このような過程を経て、06年秋に策定したのが「小西スタイル」だ。厳しい生活指導、部活動の活性化、学力の定着、組織的・計画的な進路指導（キャリアプラン）、奉仕活動の充実など、多面的な教育活動により、生徒に「私はできる」という思いを抱かせるための改革プランだ（**図1**）。当時、進路指導主任として原案作成にかかわった森川雅彦先生は、「小西スタイル」への思いを次のように語る。

「生活指導で学校に目を向かせることで、学習や部活動にきちんと取り組むようになる。更に、頑張った結果が明らかになれば、自信になり、進路に対しても前向きな意識を持てるようになると考えました。こうした好循環を生み出すために、『私はできる』という一点にしぼって、学校のあらゆる取り組みを見直しました」

「私はできる」。すなわち、生徒一人ひとりに自己効力感を持たせることが、「小西スタイル」の最大の眼目だ。生徒の気持ちを高めようと、生徒を主語にしたキャッチフレーズをさまざまな機会を捉えて訴えた。授業やテストの際には「私もわかる！」、部活や行事では「私も参加する！」、生活指導では「私も守る！」といった言葉だ。

テスト時に成績ではなく「伸び率」で表彰する。

「生徒は自分のことをだれかに認めてもらいたいと思っています。しかし、やみくもに褒めるだけでは意味がありません。生活指導で叱るべきときはきちんと叱り、生徒の努力を見逃さず、褒めるべきときには褒める。こうしたメリハリのある指導を根気よく続けることによって、生徒の学校への信頼感は高まっていくのではないでしょうか」と、人見先生は話す。

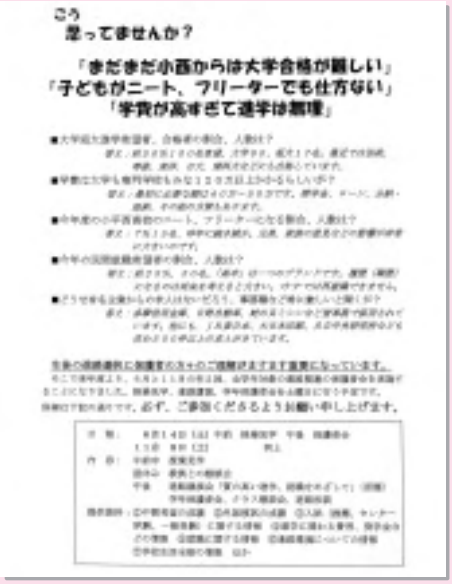
数値目標を掲げることで改革の成果が実感できる

「小西スタイル」のもう一つの特徴は、「進路決定率100％」「部活動参加率80％」といった、あえて高い数値目標を掲げた点だ。

図1　「小西スタイル」の概要

「小西スタイル」では、4つの数値目標を挙げ、それらを達成するために必要な活動を具体的に立案。わかりやすいよう図にして、教師の意識の共有化を図った

図2　保護者会の案内



小平西高校では保護者を引き付ける手段としても「数値」を活用している。08年度の保護者会の案内状には、「フリーター・ニートになる割合」「就職希望者数」などのデータを盛り込み、保護者の関心を惹くよう工夫した

る試みも、この考えが根底にあるからこそ生まれた取り組みだ。ベネッセの「基礎力診断テスト」の4月と9月の結果を比較し、伸び率の高い上位10人を壇上に上げて、校長自ら表彰状を授与

「教育には数値目標はそぐわないという意見もあります。ただ、教師は数値に頼っている部分もあると私は考えます。自分の指導は本当に正しいのかと疑問を感じたときに、数値に基づいた明確な成果があれば、安心して前に進めます。職員会議で新しい取り組みを提案するときにも、数値的な裏付けがあれば先生方の同意を得やすいでしょう」と、生活指導主任の石井裕己先生が話すように、「小西スタイル」では教師にとっても「私はできる」が重要なキーワードなのだ。

同校が大学進学率などの数値目標を掲げていることから、進学校を目指していると思われることもある。しかし、「小西スタイル」を通して目指すのは「全国一の進路多様校」だという。

『ここしか行けないから』という理由で、進路を決めてほしくないというのが、私たちの思いです。進学・就職いずれにせよ、生徒や保護者が考える以上の進路先に、あるいは生徒の希望や夢、力を最大限に発揮できる進路先へ送り出す。すべての生徒が可能性を広げ、納得できる進路を選べるよう支援するのが、『小西スタイル』の目標なのです」と森川先生は強調する。

生活面が落ち着いた今こそ学習面の改革を推進

改革開始から2年半。以前の同校を知る人は、「まるで別の学校のよう」と口をそろえる。特に変わったのは登校風景だ。07年度から生活指導部を中心に全員で登校指導を行った結果、茶髪の生徒はいなくなった。以前は遅刻しても悠々と歩く生徒が大半だったが、今では懸命に走ってくる。生徒会は自転車通行が禁止されている学校裏の遊歩道に立ち、違反する生徒を注意している。「以前の本校では考えられない光景です」と石井先生は目を細める。

学校の雰囲気も活発になった。全校生徒参加による合唱コンテストを06年度に成功させ、以降、恒例行事に定着。5割弱だった部活動参加率は、08年度には7割に達した。保護者の意識も向上し、4分の1程度だった保護者会の参加率が7割に達する学年も出てきた（**図2**）。

今後の課題は、3年間を見据えたキャリアプランの実践と定着だ。08年度1年生から本格的に始め、今後は運用・検証しながら改善していく計画だ。

「生活面で落ち着いたこれからは、学力向上にも切り込んでいくときだと考えています。まずは、1年後、2年後の生徒たちの進路状況を見極めて効果を検証し、改善すべき点は改善し、取り組みの軽減を図ったりしていきたい。個々の教師の努力から、全体としての取り組みである『小西スタイル』を定着させ、生徒の多様な進路希望が実現する全国一の進路多様校として結実させたいと思います」と川嶋直司副校長は話す。「小西スタイル」は今後の教師の奮闘にかかっている。

変革の明日を目指して

学校の将来像を語り合う中で感じたやりがい

2学年主任 **菱田 新**

◎私が赴任した当時、本校は低迷期の真っ只中にありました。茶髪の生徒が多く、生徒指導に苦しんでいました。

そんな折に進藤校長が赴任され、「将来構想会議」が発足しました。私は、言いたいことははっきり言って、何も変わらないなら辞めようという気持ちで参加しました。ところが、参加してみると、次第に真剣になっていきました。会議といえば、特定の役割を持つ人が、特定の課題について話し合うのが一般的です。しかし、この会議では、学校の将来についてだれでも自由に発言できるのです。実際、私の案が採用されたときは、心の底からやりがいを感じました。

「小西スタイル」は、特別な理論や方法論で構築されているわけではありません。重要なのは、「私はできる」というメッセージを学校全体で共有することにあると思います。「私はできる」というキーワードが教師全員の意識の根底にあることによって、生徒に声をかけるときも、新しい取り組みを企画するときも、教師全員が同じ方向に向かって、ぶれずに進むことができるようになったと感じます。

今後の課題は「小西スタイル」を定着させることです。先行して取り組んでいる2学年の主任として、「100%の進路実現」に向けて、活動を1つひとつ積み上げていきたいと思います。

自身の感性を信じて 自分にしかできない研究に挑む

MINORU

東京大名誉教授　日本学士院会員

原　實

古代インドで使われていたサンスクリット語（梵語）は、仏教の聖典にも使われ、語彙の豊富さで知られる言語だ。原實東京大名誉教授は、日本では、西洋から輸入した学問であったサンスクリット研究の常識を変えた。原典に正面から向き合い、インド宗教史研究で国際的な貢献を果たしてきたのである。原教授の人生を決めた友や師との出会い、研究の面白さをうかがった。

芸術に囲まれ育った幼少時代

子どものころは両親の教育方針で、ピアノやヴァイオリンや絵を習ったり、劇場やコンサート、美術館に連れて行かれたりと、芸術に触れて育ちました。小中学校時代は国語や漢文が好きでした。当時の教育は暗記が中心で、漢字の書き取りをしたり、美しい文章を覚えたりと基礎を叩き込まれたことは、生涯の財産となりました。

中学時代、真面目に勉強した甲斐あって、旧制高等学校に合格し、親元を離れての寮生活をすることになりました。寮では、当時流行していた弊衣破帽（ぼろぼろの衣服と破れた帽子）の姿の先輩たちが、人生を熱っぽく語っていました。先輩たちから、「カントもヘーゲルも知らないのか」と圧倒され、人生の目標のない私は自分の無知を思い知らされたのです。

そこで自分がなすべきことを考えたあげく、日本の精神文化の根底の一つである仏教を勉強しようと思いました。しかし、両親に反対されながら進学した東京大の文学部では、仏教を学んでいたのはお寺の子弟ばかり。お経も読めない私は、ノートをとることもできず、授業に全くついていけませんでした。そこで皆が大学から学び始めるインド学を選んだのです。

人生を変えた師との出会い

インド学を学ぶ中で素晴しい先生方と出会いました。大学3年間で中村元先生から基礎を叩きこまれ、旧制大学院では辻直四郎先生から学問の方法論を学びました。そして偉大な学者は自分の「学問の型」を持っているということを知りました。2年後に私はハーバード大学に留学しました。大学図書館には貴重な研究書や雑誌が整備されていましたので、毎日図書館に通って研究書や論文の文献目録を作ることにしました。

ところが、留学2年目に自分の学問を全面的に否定される出来事が起こりました。「直ちに目録作りを止めよ。他人の研究書を読む前に、原典に体当たりして自分の解釈を持て」と直属の研究室のインゴールズ先生にひどく叱られたのです。

それまでの私は西洋の一流の学問を日本に紹介すればよいと思っていました。日本ではインドや西洋の学者に肩を並べ研究を発表することなど、要求されていない。およそ自分には出来ないことと思っていたので、どうしたらよいのか全く途方に暮れてしまいました。思い余って私は日本学教授であったセルゲイ・エリセフ先生に相談に行きました。「先生は日本人ではないのに、どうして日本研究をしているのですか」と。すると先生は「私は産婦人科の医者のつもりでいる。産婦人科は自分が女性でないのに、女性以上に女性の

HARA

ことを知っている。外国人だからこそ日本人の気がつかない問題点を見つけることが出来るのだ。努力すれば必ず道は開ける」と励まして下さったのです。私には「世界で自分しかできない研究」が要求されているのだと、身の引き締まる思いでした。今思うと、老先生がよくも25歳の青二才を相手にして下さったものと、感謝の念で一杯です。

「やるからには本格的な研究をせよ」と教えて下さり、自信を失った私の背中を押して下さったこの2人の先生との出会いが、私の学問への姿勢を180度転換させ、新しい自分に「脱皮」させたのです。

大切にしたいのは感性と地道な努力

私が特に興味を持ったのはサンスクリット語の語彙の広がりです。この言語は語彙が極めて豊富で、一つの事柄を表すのに多様な語彙があります。例えば「太陽」を表すのに「万物を育むもの」「人の行いを監視しているもの」など108の語彙があります。また、一つの語彙が同時にたくさんの意味を持っています。私はインドの二大叙事詩の「マハーバーラタ」と「ラーマーヤナ」に出てくるtapas（苦行）という語を全部集めて整理してみました。すると古代インドの苦行の目的や実態が明らかになってきました。

私は生来鈍感で人より理解が遅かったので、人一倍じっくり時間をかけて原典を読む必要がありました。丁寧に取り組んだからこそ、他人の気づかない事に疑問を持つことが出来たのです。また、途中で頭が混乱してしまうので出合った語彙を一つずつカードにまとめました。このカードは40年で30万枚にも達しましたが、論文に利用したのはその中の20分の1にも及びません。思えば能率の悪い作業の連続ですが、こうした気の遠くなるような作業を積み重ねることが出来たのは、常に好奇心と根気を失わなかったからでした。

これまでの経験を通して伝えたいことは、第一に国語を大事にすることです。国語を大事にしない人は外国語も粗末にします。第二になるべく一流の芸術品に接して常に「本物」への感動を大事にし、研究に精進することです。対象に体当たりして問題の所在を見つけるには「理性」よりも「感性」の方が大事ではないかと思うことがあります。そして第三に「一期一会の縁」、人との出会いを大事にして、常に相手から学ぶ姿勢を忘れないことです。これまで私が壁にぶつかりながらも何とか勉強を続けられたのは、良き師友に恵まれていたからです。

はら・みのる　1930年東京都生まれ。東京大文学部インド哲学梵文学科卒業後、ハーバード大学に留学。帰国後、東京大助教授、同教授、国際仏教学大学院大学長を歴任。文学博士。専門はインド古典学。古代インドの宗教、文学の文献を中心に研究を進め、インド二大叙事詩を研究し、インド宗教史研究に貢献した功績は国内外で評価されている。現在は東京大名誉教授、日本学士院会員。スウェーデン王立学士院外国人会員。

◎本コーナーに登場する研究者は日本学士院の会員の方々です。日本学士院は、学術上功績のあった科学者を優遇するための機関で、人文科学70名、自然科学80名が在籍し、新会員の選定、公開講演会などの活動を行っています。会員に選定されることは研究者として名誉なこととされ、また日本学士院賞は我が国の学界では最も権威ある賞として、毎年初夏に行われる授賞式には天皇皇后両陛下がご臨席されます。http://www.japan-acad.go.jp/

脳科学

玉川大 脳科学研究所 脳科学研究センター

人間の行動を支えるのは感情か理性か、また、至高の芸術はどのようにして生まれるのか。従来、生物学や医学の研究分野だった脳科学は、いまや人間と文化や社会のかかわりへと研究領域を広げつつあり、人文科学や社会科学と融合した研究に歩みを進めている。

脳科学って？

脳の研究を通じて「人間とは何か」を探る

脳科学では、脳の中の遺伝子やたんぱく質の機能、記憶や老化のメカニズムなどについて、分子生物学や遺伝学、神経生理学などの諸分野からアプローチする。医療機器の進歩により、近年、著しく発展している学問領域だ。芸術、哲学、経済、法律など人間の生み出した文化や社会は、脳が生み出したものだ。玉川大脳科学研究所の「社会に生きる心の創成プログラム」は、人類の創出した、そうした学問に脳科学の領域から迫り、脳科学の成果を人文科学・社会科学に応用して「人間とは何か」の解明を目指している。

教授が語る

人類のあらゆる営みに脳科学からアプローチし人間の本質を追究する

坂上雅道 教授

さかがみ・まさみち　東京大大学院人文科学研究科心理学専攻博士課程中退。東京大文学部助手、順天堂大医学部助手、同講師、玉川大学術研究所助教授を経て、現在、玉川大脳科学研究所脳科学研究センター主任・教授。グローバルCOEプログラム「社会に生きる心の創成」拠点リーダー。医学博士。共編著に『脳科学と哲学の出会い～脳・生命・心』（玉川大学出版部）がある。

研究テーマ

脳科学を通して人間の情報創成のメカニズムに迫る

近年、MRI[1]などの医療機器の進歩により、脳科学の研究は大きく進展しています。これまで考えられなかった学問分野にも、脳科学の成果が応用されるようになりました。中でも著しく発展しているのが、道徳、芸術、経済、法律などの人文科学・社会科学への応用です。

脳科学といえば生物学や医学の研究対象であり、人文科学・社会科学とは直接の接点を持ちませんでした。しかし、道徳、芸術、経済、法律などは、もとはといえば、人間の脳がつくり出したもの。情報創成こそが「人間」と「動物」との決定的な違いであり、そのメカニズムの解明が脳科学の重要な役割として認識されるようになってきたのです。

私たちの研究室では、脳科学を通して情報創成のメカニズムを解明すると同時に、これまで接点のなかった「脳科学」と「人文科学・社会科学」を結び付ける枠組みの構築を目指しています。

研究の面白さ

人間の行動を支えるのは「理性」か「感情」か

どのようにして脳科学から人文科学・社会科学にアプローチするのか、例を挙げてみましょう。まず、倫理学の古典的な思考実験である「トロッコ問題」を素材として、脳が意思決定を行う仕組みを考えてみます。

制御不能のトロッコが分岐点に向かって暴走しています。分岐した先の一方には5人の作業員が、もう一方には1人の作業員がいます。あなたがポイントを切り換えることでトロッコの進む方向を決められるとしたら、どちらを選択するでしょうか。

この場面については、8割以上の人が、1人を犠牲にして5人を救うと答えます。ところが、次の場面では、答えはかなり違ってきます。線路の上に、あなたと太った男が立っている。その下の線路を暴走トロッコが走っており、その先に5人の作業員がいる。太った男を線路に落とせばトロッコを止めることができる。その場合、あなたは太った男を突き落とせるでしょうか。

このケースでは、多くの人が「何もせずに見ている」と答えます。数の論理からすれば、どちらの場合も5人の命を救えるにもかかわらず、太った男を突き落とすことができないのはなぜでしょうか。

これは、人間の倫理観あるいは道徳観を測る命題として、古くから議論されてきたテーマです。人間の行動を支えるのは理性なのか、感情なのか、それとも功利的な判断によるのか。議論を重ねても意見が分かれるだけで、結論に至ることは難しい問題です。

ところが、MRIを使って、回答者の脳の働きを調べたところ、第一の質問のときは功利的判断をつかさどる部位が活性化したのに対し、第二の質問では感情をつかさどる部位が活性化したという実験結果が出ています。

この実験結果は、有史以来、人類が議論してきた命題に一つの光明を与えるものかもしれません。これまで、人間は理性的な判断を行う生き物であり、その点が動物と決定的に違うと考えられてきました。しかし、この結果からは、人間の意思決定や

道徳・規範には、意外に非理性的な感情に左右される部分が大きいことがわかったのです。

もう一つ、人の「好み」についても興味深い実験結果があります。一般に、人間は何らかの意思決定をする際、「ある理由に基づいて物事を決める」と考えがちです。しかし、MRIで女性を選ぶ際の男性の脳の働きを調べたところ、まず、人間の運動機能や情動などをつかさどる[2]大脳基底核や大脳辺縁系が活性化し、それを受けて人間の「意識」をつかさどる[3]大脳新皮質が活性化し始めるとわかりました。つまり、この種の意思決定に際しては、まず動物と共通する下層の脳が決定を下し、より進化した脳がその理由を後付けで考えている可能性が高いのです。

写真　サルの推論能力と推論中の脳のメカニズムを調べるために、別室にいるサルの脳に電極を埋め込み、脳の細胞の働きをコンピュータで解析する

最新の脳科学を駆使して人間の意識を調べると、これまで考えられていたように、人間が必ずしも理性的に行動しているとは限らないことがわかります。私たちが常識だと思ってきた人間に対する理解は、大きく修正を迫られるかもしれません。

研究の成果

人間について知ることが他者理解につながる

これらの成果を踏まえ、研究室では、サルの脳の働きを測定し、高等動物の思考や推論のメカニズムの解明に挑んでいます。

例えば、物事を「推論」する仕組みは、科学的には明らかになっていません。私たちは、サルに推論させるような課題を与え、前頭前野の[4]ニューロンを調べました。すると、サルは直接経験していない行動と報酬との関係を予期して報酬を「推論」することが、ニューロンの活動から証明されたのです。

医療工学への応用を視野に入れた基礎研究も進んでいます。病気や事故で感覚や運動機能を失った人の、神経系が本来担っていた役割を工学的手段を使って代償しようとする[5]BMIの研究が進んでいます。

研究室では、思考や推論のメカニズムを解明するための基礎実験として、サルにゲームを行わせながら「ジュースが飲みたい」など、サルが考えていることをコンピュータに再現する実験を行い、一定の成果を上げました。自分の意思を言葉で表現できない人が、頭で念じただけで欲しいものが出てくるような装置を開発することも、将来的に夢ではないかもしれません。

一連の成果から、脳科学が「人間とは何か」という命題に光明を与えてくれるものであることがおわかりいただけたと思います。では、人間を知るということには、どのような意味があるのでしょうか。

それは、私たち人類が平和に生きていくための知恵に結び付くと、私は考えています。暴力や戦争など、人間が起こす争いの多くは、お互いを理解できないことから生じています。人間の感情や思考の構造が科学的に解明されれば、他者に対する理解や意思の疎通が円滑になるのではないでしょうか。

すぐに役立つ技能にはならなくとも、自分の研究が、人類の幸福のために役立つ日がきっと来る。そう信じて研究に邁進（まい）できることは、基礎研究者にとって何より幸せなことだと思います。

高校生へのメッセージ

興味を持ったことをとことん掘り下げてみよう

高校生の皆さんにお願いしたいのは、いろいろなことに興味を持って、貪欲に情報を集める習慣を身に付けてほしいということです。私たちの研究の場合、脳科学はあくまで手段です。研究対象は、文学や哲学、芸術、経済、法律などあらゆるジャンルに渡り、その中から自由にテーマを選んで、道なき道を歩んでいきます。

UFOや心霊現象でもよいのです。勉強が忙しいからといって放っておくのではなく、少しでも疑問があれば掘り下げて調べてみる。そういう意欲と好奇心が生きていく重要な土台となるのです。

高校生にお薦めの本

『薔薇の名前』（上・下）
（ウンベルト・エーコ著／東京創元社）
◎記号論の世界的権威であるイタリアの哲学者エーコの推理小説。14世紀の北イタリアの修道院を舞台に、次々と起こる怪事件を修道士が解き明かしていく。映画化もされた世界的ベストセラー。人間の好奇心を喚起する一冊。

『地図のない道』
（須賀敦子著／新潮社）
◎イタリアで日本文学の翻訳・紹介に努めた女流文学者の最後の作品集。日本語の美しさを堪能するのにぴったりの本です。論文執筆のためには日本語の学習も重要なので、読書もたくさんしてほしいと思います。

大学院生が語る

脳科学の研究を通して人間存在の秘密に迫る

板垣将太さん
いたがき・しょうた
玉川大大学院
工学研究科電子情報工学専攻
修士課程2年
（群馬県立前橋西高校出身）

研究の概要

耳の聞こえない人の聴覚の機能を追究

私は、耳が聞こえない人の脳の中で聴覚をつかさどる部位である「聴覚野（Auditory Cortex）」がどのように働いているのかを研究しています。耳が聞こえない人は、音情報の入力がないため、聴覚野は使われていないと考えられがちですが、実はそうではありません。耳の聞こえない人でも、文字を見たり手話で会話をしたりするときは、聴覚野が活動しているということが、MRIによる実験で明らかになっています。

私は、「聴覚野が視覚情報の『音韻化』に関係する」という説に注目し、実験を進めました。耳の聞こえる人と聞こえない人を被験者とし、平仮名と指文字、アラビア数字を見てもらい、MRIでデータをとって解析・比較を試みました。その結果、耳が聞こえない人の聴覚野は、自身が言語として理解できる平仮名と指文字に反応し、外来文字であるアラビア数字に対する反応は鈍いことがわかりました。

耳が聞こえない人の聴覚野は、視覚情報を音韻化する機能と深いかかわりがあることが、この実験結果から明らかになったのです。

将来の展望

ITと脳科学の知識で未来を切り開きたい

「人間の意識」というものに興味を持ったのは中高生時代でした。なぜ、自分という人間がこの世に存在しているのか、動物との究極の差はどこにあるのだろうか。

こうした疑問を解決するためには、まず人間がどのようにできているのかを知る必要があると考え、分子生物学を学ぶために農学部に進みました。しかし、学部で4年間学び、人体を構成する分子やDNAなどについては理解したのですが、人間の心や意識のメカニズムまではわからないということに気づきました。そこで、ダイレクトに人間の意識について学べる環境を探し、坂上教授の研究室に入りました。

修士課程修了後は、IT企業への就職が決まっています。脳科学と直接関係のある仕事ではありませんが、大学院での研究は無駄ではないと思っています。脳科学の研究者の中には、自分たちが取り組んでいる研究が実用化されるのは遠い未来の話だ、と割り切って研究している人が少なくありません。しかし、私は、研究が進み、活用できる道筋が整えば爆発的に普及するのではないかと推測しています。そのときに、強力なパートナーになるのはITであり、脳科学の知識は必ず有力な武器になると確信しています。

脳科学の知見が役立つ日を夢見ながら、社会人として力を磨いていきたいと思います。

板垣さんの1日

- 9:00 起床
- 12:00 研究開始　昼食後に研究開始。終日、コンピュータでデータを解析したり、MRIの実験を行ったりする。
- 22:00 研究終了　早いときには19時ごろには研究が終わるが、たいていはこの時間。終電がなくなり、友人の家に泊めてもらうこともある。
- 0:00
- 2:00 帰宅　就寝まで、夕食を食べたり、インターネット情報を見たりして過ごす。
- 就寝

高校生へのメッセージ

一生懸命取り組めばまわりが支えてくれる

高校時代はどのような道に進めばよいのかわからず、目標を持てない日々を送ったこともありました。今思うのは、目標を持って取り組んでいれば、道は開けるということ。もう1つは、一生懸命取り組めば、必ずだれかが支えてくれるということです。現在の研究生活も、学部の学習に飽き足らず、自分から脳科学研究所の門をたたいたことが始まりでした。自分から働きかけていけば、きっとつかむものはある。それを信じて、自ら道を切り開いてください。

用語解説

❶MRI
磁気共鳴画像診断法。電波と強力な磁力を身体に当てることによって、身体の内部をさまざまな角度から断面図として映し出す装置。

❷大脳基底核と大脳辺縁系
大脳基底核は運動や認知機能を担う部位、大脳辺縁系（海馬、扁桃核など）は周縁の生存や生殖、情動に関与する部分をいう。脳の中で多くの哺乳動物と共通する原始的な部位で、俗に「動物脳」ともいわれる。

❸大脳新皮質
大脳の中で比較的新しい表面の部位。高等な生物ほど大きく、人間は最も発達している。思考や創造などの理性をつかさどる前頭葉、触覚や筋肉の収縮をつかさどる頭頂葉、記憶や聴覚などを担当する側頭葉、視覚情報を処理する後頭葉からなる。

❹ニューロン
脳を構成する神経細胞で、情報処理・情報伝達の機能を果たす。人間の脳には1000億個以上のニューロンがあり、網の目のようにつながってネットワークを形成している。

❺BMI（Brain Machine Interface）
マンマシンインターフェース（機械と人間との間で情報のやり取りを行う仕組みや機器の総称）の一種。脳の活動を電気信号にしてコンピュータとやり取りし、人間が意図・想像したことを機械を介して表現・実行する。全身麻痺の患者がロボットアームを動かすなど、介護や福祉の分野で実用化されている。

英語ディベートを通して全国に広がる友情の輪

第3回全国高校生英語ディベート大会

2008年12月、岐阜県の岐阜聖徳学園大において、「全国高校生英語ディベート大会」が開かれた。高校生対象の全国規模の英語ディベート大会としては、本大会が国内唯一のものだ。第3回となる今大会では、全国24都道府県から62校が集い、2日間に渡って熱い論戦が繰り広げられた。

世界大会出場権を賭けた日本で唯一の全国大会

「全国高校生英語ディベート大会」は、全国高校英語ディベート連盟主催、GTEC for STUDENTS（株式会社ベネッセコーポレーション）共催による、高校生対象の全国的な英語ディベート大会だ（注1）。本大会の実施以前は、各地方で英語ディベート大会が実施されていた。2005年に11都県26校が参加してプレ大会を実施し、第1回大会は17都府県38校、第2回大会は22都道府県50校と、回を重ねるごとに参加校を増やしていった。第3回の今大会には、北海道から鹿児島までの24都道府県から62校が参加した。

本大会はWSDC（World Schools Debating Championships）に公式認定され、今大会から世界大会の日本代表選考会も兼ねることになった。優勝チームには、09年2月にアテネで開催される世界大会への出場資格が与えられる。また、第1回大会から文部科学省の後援を受けており、名実共に高校生を対象とした英語ディベートの全国大会として位置付けられたといえる。

本大会で採用しているディベートの形式は、議論の仕方を学び、相手の主張を正しく理解することを目的とした「アカデミックディベート」だ。ディベート時間は1回約40分。2チームが肯定側と否定側に分かれて対戦する。肯定側が肯定の理由を述べたのち（4分）、否定側からの質疑（3分）→否定側の立論（4分）→肯定側の質疑（3分）というように、規定の持ち時間、順番に沿って議論。ジャッジがどちらのチームがより論理的で説得力が高いかを判定して勝敗を決める。参加チームは1校につき1チームで、出場は原則4人。予選4試合中2試合が終了した段階で、残り2試合をパワーペアリング（注2）で行い、上位8チームが決勝トーナメントに進む。

今回のテーマは「日本は、法的成人年齢を18歳に引き下げるべきである。是か非か」。英語ディベートでは、英語が堪能なチームが必ずしも勝つとは限らない。限られた時間の中で、相手の主張に耳を傾けつつ明確な根拠を示し、いかに自説を論理的に構築できるかが勝敗の鍵を握る。

注1　詳しくは、全国高校英語ディベート連盟のホームページhttp://henda.sakura.ne.jp/または、GTEC for STUDENTSホームページhttp://gtec.for-students.jp/debate/index.html

注2　できるだけ勝数が同じチーム同士が対戦し、当たりの善し悪しの影響を減らす対戦方法

論戦を通じて生まれる他校生との友情

決勝に進んだのは、神奈川県の私立栄光学園高校と埼玉県立伊奈学園総合高校。出場全チームが見守る中、否定側が無責任な投票の弊害や少年院の更生教育の重要性を鋭く論じれば、肯定側はデータの根拠を求めるというスリリングな論戦が展開された。甲乙つけがたい熱戦だったが、最後は冷静に論陣を張った栄光学園高校が世界大会への切符を手にした。

英語ディベートの意義は、英語を手段として使うことによって、英語スキルが格段に上がると見込める点にある。ただ、大会の意義はそれだけではない。本大会のコンセプトは「Make friends」。ディベートを通じて仲間づくりをすることが最大のねらいだ。

互いの意見を交わす中で、それまで顔も知らなかった生徒同士が知己になる。教室で学んだ英語で外の世界とつながることが、何よりも重要なのである。実際、一試合終えるごとに、生徒同士が名前や連絡先を交換する姿が会場の各所で見られた。閉会式が終わったのちも、多くの生徒が会場に残り、他校の生徒と記念撮影をしたり、健闘をたたえ合ったりする光景が続いた。ディベートを通じて得た達成感、ライバルと心を通わせた経験は、生徒にとって生涯の財産になるだろう。

第4回大会は09年12月に埼玉県で開催予定。更に熱い論戦が繰り広げられることを期待したい。

決勝に進んだのは、埼玉県立伊奈学園総合高校（写真右）、栄光学園高校（写真左）。大勢の関係者・来賓の見守る中、リラックスした雰囲気で進められた

試合が終われば、対戦相手も友だち。互いの健闘をたたえ合い、ネームプレートに名前や連絡先を書き合う姿が見られた

優秀ディベーター賞には、全参加校から6人が選ばれた。表彰式のあとは皆で記念撮影をし合っていた

大会運営委員

今井りえ子先生 岐阜県立益田清風高校

左から美濃羽宗徳（岐阜県・聖マリア女学院高校）／三原伸剛（和歌山県・近畿大学附属和歌山高校）／今井りえ子（岐阜県立益田清風高校）／山田悦司（岐阜県立岐阜工業高校）／渡部正実（岐阜県立土岐商業高校）

◎本大会の最も重要な意義は、生徒たちが他校の生徒との交流を通して刺激を受けることにあります。参加した生徒のほとんどが、「同世代にこれほど英語を駆使できるすごい生徒がいるのか」という大きな驚きを体験します。その驚きは、新たな目標にもなるのです。英語の学習を頑張る生徒にとって、目標が示されることは非常に大きな意味があります。

ディベートの練習を通じて、生徒の実践的英語力と論理的思考力は飛躍的に伸びます。自分が組み立てた理論を「伝えたい」と強く思うと同時に、相手の意見を懸命に「理解しよう」とします。この2つの気持ちが英語学習の最大の動機付けになるのです。

「Challenge English」は本大会のコンセプトの1つです。スポーツや文化活動の大会と同様、自分が身につけた英語力をディベートという「競技」の中で更に磨いていく。試合を重ねるごとに成長していく生徒たちには目を見張るものがあります。全国の難関校の生徒と対等に渡りあうことができれば、大きな自信にもつながります。

勤務校でも英語ディベートを取り入れて4年が経ちました。生徒は何事にも積極的になり、常に上を目指すように成長していきました。ディベートの面白さに気づいた生徒が、その魅力の虜になることは間違いありません。大会運営を通して、そうしたディベートの魅力を全国の高校生に届けられたなら、大変嬉しく思います。

優勝　神奈川県・私立栄光学園高校

優勝メンバー

◎今大会出場で得た最大の成果は、ディベートの楽しさに気づいたこと。優勝はもちろん嬉しいですが、勝ち進むことでより多くのディベートを体験できたことが何よりも嬉しかったです。

最初、ディフェンスのコツがつかめず戸惑いました。ジャッジから自分たちの質問が相手に対するアタックになっていると指摘され、攻め方を修正できたことは大きかったです。以降、質問では相手の意見を明確にすること、ディフェンスでは自分たちの立場を守ることに専念しました。今回の経験を生かし、大学進学後も英語を使った活動を通じてディベートのスキルを磨いていきたいと思います。

小池正克先生

◎優勝チームの生徒たちは入学当初から英語学習に熱心で、校内英会話昼食会や海外高校生短期研修プログラムに参加するなど、英語を使う機会が豊富にありました。加えて、今回のテーマである18歳成人の問題についても、日常的に友人と語り合ったり、他校と練習試合をしたりするなど一生懸命準備していました。日頃からの彼らの努力が大一番で実ったことを嬉しく、また誇りに思います。英語ディベートへの挑戦によって自主的に学ぶ意欲が育まれることを実感しました。生徒だけでなく、私自身も他校の先生方との交流が深まったことは刺激になりました。

今後は英語ディベートに興味を持つ生徒を増やし、裾野を広げていきたいと考えています。中央大の矢野善郎審査委員長をはじめ、ここまで支えていただいた多くの関係者に感謝します。

VIEW'S REPORT ②

30代教師が語る指導の悩み

今後、学校で中核を担っていく30代教師の指導力向上は
学校全体の活性化には欠かせない。
しかし、教師同士のつながりが希薄だったり、年齢層ごとの教師数のバランスが悪かったりと、
彼らを取り巻く環境は厳しい。
30代の教師が抱く指導上の課題についてインタビューを通して整理し、
指導力を学校組織として高めるために何が必要なのかを考えたい。

層が薄いからこそ30代の育成が重要

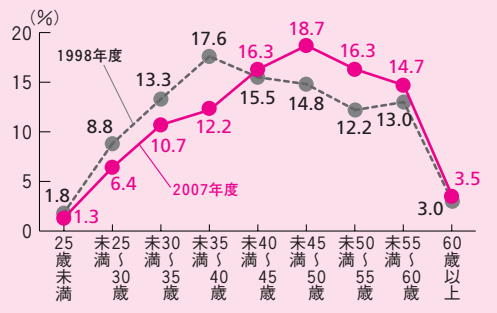
団塊世代の大量退職を迎え、高校現場では今後10年間で約3割の教師が定年退職すると予測される。ベテラン教師の経験に裏打ちされた指導力をいかに次代の教師に引き継ぐかは、早急に対策を講じなければならない課題だ。

この課題解決の鍵となるのは、30代の教師だろう。この世代は新卒採用が抑えられていたので教師数が少なく、10年前と比べて全教師数に占める割合が最も減っている（図）。ところが、現在、都市圏を中心に採用が増えているため、今後、20代の教師は増加すると予測できる。このような環境の中、中間に位置する30代が果たす役割は重要となる。

いうまでもなく、高校は、小・中学校と違い、学校によって生徒の学力層が大きく異なる。生徒指導・教科指導・進路指導のいずれもが学校ごとに特色があり、教師に求められる指導力も変わる。しかし、そうした指導力は暗黙知であることが多く、書面や図表などの形式知として引き継ぐことが難しい。従来、指導力を高める仕掛けは、世代間のバランスが取れた教師間では自然と醸成されていた。しかし、完全学校週五日制などによって、教師はますます多忙となり、職員室で雑談をしたり、学校外で交流をしたりする機会が減っている。実際、編集部に読者から寄せられる声の中には、同僚との交流がほとんどないという悩みや、世代間ギャップを背景としたコミュニケーションの難しさが挙げられている。

今後、中核となる30代教師は、どのような問題意識を持ち、日々の指導にあたっているのか。2人の30代の教師の体験を通して探っていく。

図　1988年度・2007年度の高校教師の年齢層分布



出典／文部科学省「平成10年度学校教員統計調査」
「平成19年度学校教員統計調査（中間報告）」

生徒の進路が多様だから具体的な目標を定めぶれない指導を行いたい

群馬県立前橋西高校教諭
中山剛志 Nakayama Takeshi

教職歴10年（非常勤含む）。5校目となる同校に赴任して4年目。日本史・世界史担当。国際科の3学年担任。校務分掌は教務部「国際部」。部活動では野球部監督。
【学校概要】1学年生徒数…普通科約160名、国際科約40名／08年度進路実績…国公立大9名、私立大延べ186名、短大・専門学校75名、就職21名

日々の会話の積み重ねで先輩・同僚と相談できる関係に

本校赴任2年目に、1学年担任となりました。学年に1学級ある国際科で、クラス替えはなく、担任も3年間替わらないことが多いです。初担任でしたが、生徒が「学校が楽しい」と思える学級づくりを目指しました。3年かけて自分が思い描いていた「何事にも目標を持って努力し、団結する学級」に近付けたと思います。

指導に迷ったときによく相談したのは、学年主任、上の学年の国際科の担任の先生、当時野球部の監督だった先生です。よく言われたのは「先を見越してとにかく先手を打つ」。例えば、1年生の夏休み後は生活態度が乱れる生徒が出てくるので、1学期中に牽制しておく。進路を早く決めたくて安易な選択をする生徒が出てくるので、1年生から自分の興味・関心のある分野は何なのかを考えさせておく。**一歩先の指導を生徒個々に働きかけ、学級をまとめている先生方の姿は、私の目標でした。**

私が恵まれていたのは、共通の知り合いや部活動を通して話すようになった先生が多くいたことです。その先生方が相談しやすい雰囲気をつくってくださったことも幸いでした。短くても会話を積み重ねていくうちにつながりができ、次第に指導の相談もできるようになりました。本校の先生方はもちろんですが、他校へ異動された先生にも、今もメールや電話で相談に乗ってもらっています。

出願動向や伸びしろも予測した組織立った指導力が課題

担任をする中で最も課題に感じたのは、進路指導の知識不足です。41人の生徒の進路は4年制大、短大、専門学校、就職と多様で、自分の今の知識だけでは対応できません。わからないことはわからないと生徒に正直に言い、一緒に調べたり、進路指導部の先生に相談させたりしました。

最も悩んだのは出願校の決定です。経済的な理由から国公立大しか行けない、地元大学のみ、特待生入試を受けたい……といった生徒個々の条件に合わせながら、生徒が学びたいと思う学部・学科を共に考え、合格の可能性を探る。入試方式も多様で判断が難しく、手探りの状態で進めました。先輩の先生方を見ていると、生徒一人ひとりの希望・学力はもちろん、伸びしろや出願動向も予測して出願校を提示し、生徒は実際に合格しています。それは経験がなせる技なのか、データ分析の積み重ねなのか……とにかく驚くばかりです。**私もそのように生徒を導ける知識と判断力を身に付けたいですし、是非教えていただきたいと思っています。**

受験に向けた雰囲気づくりは、学級だけの取り組みでは難しいと感じました。生徒と最も向き合うのは学級担任ですが、普段の授業の働きかけも重要で、教科担任との連携が大切です。生徒の進路が多様であるが故に学年共通、学校共通で具体的な目標を立てるのは難しく、教科間においても足並みをそろえた指導は簡単ではありません。ただ、学級担任として生徒と日々向き合う中で感じるのは、たとえ達成が難しくても、組織として高い目標があれば、生徒の今以上の成長に結びつく指導ができるのではないか、ということです。具体的な目標があれば、教師は目標を意識して生徒に働きかけ、指導を工夫できます。3年間の学級担任の経験を踏まえ、目標の下に教師が一致団結し、生徒の本気を引き出す指導に必要なこととは何か、ということに私の関心は向かっています。

活動のヒントを得るために他校の教師や異業種の人と交流する機会を確保したい

福岡県・私立福岡工業大学附属城東高校教諭
松尾智晴 Matsuo Tomoharu

新卒採用で同校に赴任し、教職歴15年。数学科担当。学年主任として3年間持ち上がりを2回経験後、現在、1学年担任・学年主任。総勢24人の教師を束ねる。校務分掌は入試広報。
【学校概要】1学年生徒数…普通科426名、電気科135名、電子情報科110名／08年度進路実績…国公立大・大学校54名、私立大延べ1210名、短大・専門学校107名、就職94名

場の空気を感じて生徒に考えさせる授業を

教師としての最初の転機は10年前、本校の学校改革時に進学アドバイザーとして赴任された数学の先生との出会いでした。その先生に担当する土曜講座を1年間見てもらい、さまざまなアドバイスをもらいました。

何度も「生徒の思考を妨げている」と言われたものです。「なぜあのときにヒントを出したのか」「例の持ち出し方が悪い」「あの問題にもっと時間をかけてもよかった」など、具体的に指摘されました。先生いわく、「生徒の姿勢や視線、手の動かし方などを見て、場の空気を感じながら、ヒントを出す相手やタイミングを見計らわなくてはならない」。当時の私といえば、「『場の空気を読め』と言われても、どうすればよいのか」というのが本音で、自分としては生徒を見ているつもりでした。ただ、授業で沈黙が続くと耐えきれずに私から話をしてしまったり、学力を伸ばしたくて問題をたくさん解かせたりしていました。そうすれば、生徒の学力が伸びると信じていたからです。

しかし、先生から指摘を受け、試行錯誤を積み重ねるうちに、「今日はここまで進んだ」「これだけ教えた」とは、教師の自己満足でしかないとわかりました。教師が一方的に教えるだけでは、生徒の学力は一定以上伸びません。生徒が本当に成長できるよう、生徒主体で進める授業を目指すようになりました。

私は生徒の書いた答案に赤字を入れるとき、必ず一番薄い赤色のインクを使います。「教師が、生徒の書いてきた答案というメッセージよりも濃く書くべきではない」。そう教わった言葉が今も心に強く残っているからです。生徒一人ひとりを見て、その思いを感じて、変化に対応するのには早くなったように思います。

成長期にある若手にこそ学外での交流が必要

先生に言われた「生徒に考えさせる授業」の実現はまだまだです。受け身の生徒をどうすれば自ら考えるようにできるのかは大きな課題です。授業では例題の解答にわざと誤答を書いて間違えている箇所を考えさせたり、「学習ノート」として毎日、自由課題に取り組ませたりしています。生徒は宿題をきちんと提出し、定期考査で良い点を取りますが、教師が与えた到達度で止まってしまう。授業を通して、生徒が主体的に学びに向かう方法を模索しています。

本校では教科ごとに最低月1回は「授業改善研修」を行っています。ただ、教科指導力の向上には、学外の人と交流する必要もあると考えています。他校や異業種とのかかわりは、新しい発見につながるからです。また、教師は人間性が問われる職業です。さまざまな人との交流を通して教師が得たことは、すべて生徒の成長に結び付きます。**成長期にある若手にこそ、勉強の場や機会がもっと必要**なのではないかと思います。

私は教師の研究会があると聞けば他県でもできるだけ参加しますし、教育とは直接関係なくても興味のある講演会には出かけています。学年団の先生にも「こういう会に参加しませんか」と声をかけ、「学外での研修」を勧めています。校内で指導力を伸ばすのは大前提ですが、外にも目を向けて課題解決のヒントを探していきたいです。ただ、多忙のせいもあり、学外に出かけるのはなかなか難しいのが現状。有益な情報を収集し、生徒を啓発するような授業力を身につけることが自身の課題です。

文学座附属演劇研究所

人に興味を持ち、人の話を聞くことが俳優としての第一歩

いい演技に求められる他人への関心

創立以来、70年以上の長きにわたって日本の演劇界をリードしてきた文学座。若手俳優の育成に力を注いできたこの劇団は、創立当時の理念を確実に継承しつつ、常に現代人の生活感情に根ざした芝居を上演し続けてきた。伝統を守りながらもいつの時代にも実力派として認められる俳優をどのように育ててきたのか、東京・信濃町の文学座附属演劇研究所で話を聞いた。

俳優養成はセリフ回しから始まる

文学座は、日本の近代演劇史を象徴する存在であると同時に、現在でもわが国演劇界の中核に位置する劇団だ。加藤武、江守徹といった有名俳優を筆頭に多くの演劇人が輩出し、付属する演劇人の養成機関である文学座附属演劇研究所（以下、研究所）では、今もプロの俳優を目指す多くの若者が学ぶ。創立に際して起草された文章の中に、次のような言葉がある。「内に於いては、名実ともに現代俳優たり得る人材の出現に力を尽くしたいのであります」（1938年試演プログラムの『文学座創立について』より）。

この言葉の通り、文学座は設立の翌年に研究所を開設した。現在の研究所は本科（1年間）と研修科（2年間）に分かれており、本科の受験資格は18歳以上。例年、300名を超える受験者の中から60名が合格する。合格者の平均年齢は20代前半。高校を卒業してすぐに入所する者ばかりでなく、大学生、大学中退者、社会人経験者、他劇団の経験者などが集まる。研修科に進めるのは、このうちわずか15名程度。

研修科を卒業すると、その中でさらに選抜を通った者だけが座の見習いである準座員になれる。その後、正式な座員となるにはさらに2年が必要だ。採用されるかどうかは、実力はもちろんのことながら、その時、座が必要とする個性を持っているか否かにも大きく左右される。座員になれるのはほんの一握りというわけだ。しかし、だからといって研究所を途中で去っていく者はほとんどおらず、また卒業後も演劇から遠ざかる者は少ない。研究生たちは、授業の合間を縫いながら、授業料を稼ぐため日々アルバイトに精を出している。

研究所のカリキュラムは、本科の場合、月曜から土曜まで1時間半の授業が1日に2コマずつ。授業の内容は戯曲をベースにした芝居の稽古に、体操、音楽、殺陣の

文学座附属演劇研究所 Profile

文学座附属演劇研究所の母体である文学座は、1937年、3人の文学者、岸田国士、久保田万太郎、岩田豊雄によって設立された。文学者が設立し、文学作品を演目の中心に据えてきたことが、文学座という座名の由来だ。森本薫、三島由紀夫、有吉佐和子など国内の優れた文学者の作品を上演する一方、カミュやサルトルなどの作品にいち早く取り組むなど、前衛性の高い演目にも積極的に挑戦してきた伝統を持つ。研究所は文学座が運営する俳優養成機関。現在のように毎年研究生の募集を行う学校形式になったのは、1960年からである。

文学座代表幹事・文学座附属演劇研究所所長
戌井市郎（左）
いぬい・いちろう　演出家。文学座創立メンバー。研究所所長として若手育成に尽力。

文学座附属演劇研究所主事
鵜澤秀行（右）
うざわ・ひでゆき　俳優。研究所7期卒業生。現在、後進の指導に当たっている。

文学座附属演劇研究所

人に興味を持ち、人の話を聞くことが俳優としての第一歩

いい演技に求められる他人への関心

稽古が週に3コマ。卒業公演を含めて年に3回の発表会を行う。研修科に上がると、週に3コマの必修科目（体操、音楽、ダンス）以外は、発表会に向けた稽古が中心で、1日6時間程度で1か月半ほど続く。発表会は年4回行われる。

稽古の中で、最も重視されるのはセリフだ。戌井市郎研究所所長いわく、「文学座は文学を原点とする劇団ですから、授業では言葉、つまりセリフ回しを最も大切にします。現代人の生活感情に根ざした舞台は、リアリティのあるセリフ回しによってこそ成り立つもの。本科では、ともかく観客に伝わるセリフを舞台の上で喋れるようになることを目指します」。

文学座の座員はセリフがうまいとの評判が高く、声優としてのニーズも多いが、この点に劇団の出自が関係しているというから面白い。鵜澤秀行主事が平田オリザの言葉を借りていうには、プロレタリアート劇団として出発した劇団の場合、セリフ中の"主張したいこと"を強調する稽古をするため、"強弱"でセリフを喋ることになる。

一方、芸術至上主義を標榜してきた文学座の場合、日常的な、自然な口調で喋る訓練を受けるため、"高低"で喋ることになり、聞く者の耳に入りやすいのだという。研究生たちは、稽古で訛りの矯正や標準語のアクセントの習得を徹底的に指導される。自身、研究所の卒業生でもある鵜澤主事はいう。「ここまで徹底的にセリフの指導をするところは、他の劇団の研究所にはないでしょう。『へえ』という返事一つを、1日かけて指導されたこともありますよ」。

欠点を具体的に伝える指導方法

セリフを中心にした演技の指導方法にも、文学座独特の伝統がある。

「研究所では、座学よりも実技を中心とした授業を行っています。また、指導する際にも、抽象的な論理を教えることはありません。あくまでも具体的に、例えば『腹から声を出せ』などと指導します。ただし、一つの型にはめこむために指導をするのではありません。ともかく自由にやらせてみて、直すべきところを指摘するだけ。これは、創設以来70余年間変わらない伝統です」（戌井所長）

「演出家は、決して『こういう言い方をしろ』とはいいません。北村和夫さんがよく、『ともかくやってみる、言ってみる、動いてみる』とおっしゃっていましたが、積極的に恥をかけというのが文学座の伝統。恥をかくことを恐れずに、自分の考えたことを演出家にぶつけていくことが必要不可欠です」（鵜澤主事）

実際の授業風景を覗いてみると、研修科の発表会の演目である『雨空』（久保田万太郎作）の稽古が行われていた。指導に当たる戌井所長は、和服を着た一組の男女の会話の場面で、男性役者のセリフに「もっとサラリと」「自然にいってごらん」と短い言葉で何度もやり直しをさせている。男性は、その都度少しずつ言い方を変えていく。直されなくなって、ようやく次のセリフへと進む。延々とその繰り返し。手取り足取りの指導とはほど遠く、一見、冷淡にさえ見える。

戌井所長は「演技というのは演出家にいわれた通りのことをやればいいわけではありません。自分で考えることが必要です。何度同じことをいっても、セリフ回しを含め、場面に合った演技が永遠にできない研究生もいます。そうなるとダメなものはダメとしかいえませんね」と語る。

ある研究生はいう。「厳しいとは思いません。役者を目指しているのは自分ですから、やり直しさせられてそれをクリアできなければ、自分は役者になれないんだと思うだけです。成長するには自分で歩くしかない」。

芝居を通して人間関係を学ぶ

鵜澤主事は、最近入所してくる若者たちの様子を見ていて、気にかかることがあるという。「核家族で育ったせいでしょうか、お年寄りや小さな子どもに触れずに育ってきている子が多く、全体的に、人と交わるのが苦手な子が多いようです。生身の人間に対する興味が薄い印象を受けます」。

しかし、芝居は複数の人間がつくり上げていくもの。否が応でも人と関わらなければできない。

「役者に必要なのは他人への関心ですね。舞台でも他人の演技に興味を持てなければ、いい演技はできません」（鵜澤主事）

ある研究生は、「今でも喋ることは苦手なのですが、研究所に入ってから、『相手のセリフを聞いたふりをするな。本当に聞いて、自分の言葉として本当に伝えろ』としつこく指導されてきました。これを舞台でやるのはまだまだ難しいのですが、少なくとも、人の話を聞こうとする努力だけはできるようになったと思います」と語る。

また、研究所に入るまで友達をほとんどつくれなかっ

たというある研究生は、当初、複数の人間と密接に関わりながら一つの芝居をつくり上げていくことが、とても苦痛だったという。

「私は不器用なので、人付き合いがなかなかうまくできないんです。でも、芝居の稽古を積んでいくうちに、あることに気付きました。それは、こちらが楽しく演じられたときは、相手役も『今日は楽しかったね』といってくれることです。相手役は自分を映す鏡なんですね」

「当然ですが、他人がいてこそ芝居は成り立ちます。役者には独りよがりでない、他人を顧みることも求められるのです」（戌井所長）

最後に、戌井所長は役者に必要不可欠な資質として、「創意」と「忍耐」の二つを挙げた。

「何事もそうですが、実力というのは一朝一夕で付くものではありません。特に実力ある役者になるためには、日々の稽古がものをいいます。私自身を含め、研究所で研究生の指導に当たっている者は、常に芝居における新しい時代をつくっていけるような、スター性のある新人を世に送り出すことを目標に、やりがいを感じて取り組んでいます」

プロの役者になれるのはほんの一握りかもしれないが、研究生は芝居を通して貴重な経験を積んでいる。ある研究生に、「いい役者の条件とは?」と尋ねてみると、こんな答えが返ってきた。

「芝居のうまさも大切ですが、最後は、人間的な魅力であることが分かってきました」

教師の思い、メッセージを生徒に効果的に伝える！　生きたデータの見せ方・つくり方

今月のテーマ

1年生春休み前後の学習意識の向上

指導の重要性

さまざまな業務が山積し、じっくりと生徒に向き合う時間が確保しにくい3月。この時期では特に、教師の負担にならずに、生徒を学習に向かわせ、進路意識を醸成させる指導が求められる。中でも、低学年指導の一区切りとなる1年生春休みは、学習習慣の見直しをはじめとする、高校生活の仕切り直しの機会として重要である。高いモチベーションを保って高2の1年をスタートさせるためのこの時期の指導について考えていく。

※データは、高校の先生方へのヒアリングを基に編集部が作成したサンプルです。

目標 1 アンケートを有効活用する

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

ダウンロード

❶ 1年間の振り返りアンケート

現在の1週間の家庭学習時間（教科別）	英（　）数（　）国（　）理（　）地歴・公（　）
志望校	
・第1志望　（志望理由　　）	
・第2志望　（志望理由　　）	
・第3志望　（志望理由　　）	
好きな教科	苦手な教科
努力した教科	1年間の学習面での反省・課題
部活動（役職、ポジション）	趣味・特技
1年間の生活面での反省	
今年1年間自分が頑張ったこと	

これらの質問で本人の意識と実際の成績とのギャップを確認し、今後の面談などの材料にする

資格取得や趣味など自由に書かせ、生徒がどんな分野に興味を持ち、取り組んでいるかを知る

❷ 3年生に聞いておきたい質問一覧

- 高校3年間でどの時期が最も大事だと思いますか？
- 高校3年間で一番辛い（大変だった）時期はいつですか？
- 勉強を頑張れた理由は何ですか？
- ○○高校に入って良かったことは何ですか？
- 志望校はいつ決めましたか？
- 部活動を通して、身に付けたものは何ですか？
- 勉強中のストレス解消法は？
- 各学年で、平均どのくらい勉強していましたか？

データ作成・加工のPOINT

1年生の3月は、高校入試の準備、指導要録作成などさまざまな業務があり、生徒に向き合う時間がどうしても減ってしまう時期だ。一方で、指導要録作成のために、生徒にアンケートなどを実施している高校も多いが、活用が十分でない場合もあるようだ。せっかくのアンケートを生かすために、❶のような項目を追加して調査すれば、次年度の学年への有効な引き継ぎ資料になるだろう。また、3年生が卒業する前に、❷などの項目でアンケートを取っておけば、「卒業生の声」として、今後、あらゆる場面で意識付けに生かせる。

プラスαの一工夫

振り返りアンケートを学年全体で実施する

振り返りアンケートは、個々のクラスで実施するのではなく、学年全体で実施する方がより効果的だ。質問項目も統一した上で新担任に渡せば、生徒把握の資料になる。また、生徒に記入させる際は、「このアンケートは2年生になったときの担任に渡す」と伝え、2年生になることをいち早く意識付けるとよいだろう。

生徒が知りたいことを3年生に聞く

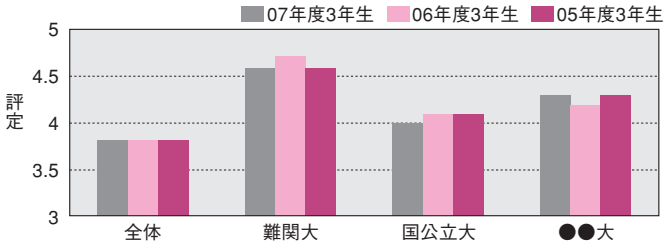
3年生にアンケートを取る際、1、2年生に「どんなことが知りたいか」を確認しておくとよい。「塾には行った方がよいか」「数学の苦手な人向けのオススメ問題集は」といった質問も挙がるだろうが、それは1、2年生の抱える課題を明らかにする材料にもなる。

目標 2 先輩のデータで意識を学習へ向かわせる

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

ダウンロード

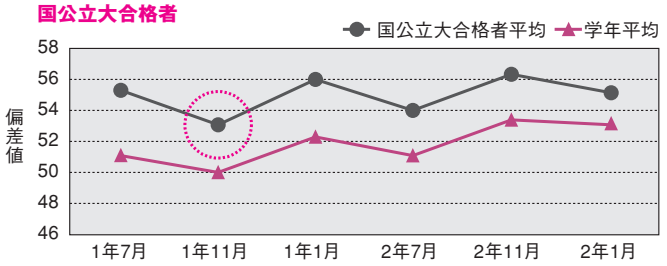
❸ 合格大グループ別3年間の評定平均値



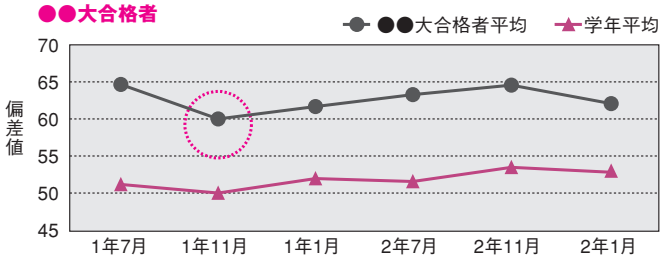
●ポイント
日々の学習の成果である評定平均値と、入試の結果に相関関係があることを示すデータ。高い評定を取らせることが目的ではなく、継続的な学習の大切さを伝えることが目的である。教科書や学校指定の問題集にしっかり取り組むことが入試対策に直結することを理解させる

❹ 合格大グループ別模試成績推移

国公立大合格者



●●大合格者



●ポイント
前年度の合格者の模試偏差値推移を、難関大合格者、地元国公立大合格者、地元私立大合格者などのグループに分けて集計する。成績の上昇下降はあっても、だいたいこれくらいの成績をキープする必要があるという、自分のいるべき位置をイメージできる

データ作成・加工のPOINT

この時期は、教師にとっては生徒に対して時間をかけにくい時期であると同時に、生徒にとっても学習意欲が低下しがちな時期である。特に学年末テストが終わると、具体的な目標がなくなってしまい、授業に集中できなくなる生徒も増えてくる。そんな中で、生徒のモチベーションを維持するため、校内実力テストを実施するなど、何とか生徒の意識を学習へ向かわせようとする学校も多い。また、日々の学習が入試に直結していることを、この時期、改めて生徒に訴えることも必要だろう。❸で、志望大のレベルと評定平均には相関があり「評定平均＝日々の授業」であることを意識付けしたり、前年度の合格者の模試偏差値推移を難関大合格者、国公立大合格者などグループごとに集計した❹で、模試成績を振り返らせたりするなど、データを効果的に活用し、意識を学習へ向けるようにしたい。

プラスαの一工夫

ねらいによってデータを加工する

上記以外にも別の切り口でデータをつくることで、効果的なものになる。生徒に1年生からの評定が重要だということを意識付けしたければ、前年度の3年生の3年間の評定平均値の推移を合格大グループ別に提示するなど、ねらいによってデータを加工していきたい。

定期試験、実力テストの順位との相関を見る

定期試験や実力テストの平均順位との相関を見ることでも、「志望校の合格は、日々の授業の延長線上にある」ことを意識付けられる。学校内でのテストの順位と大学合格実績との関係を気にする保護者は多いので、保護者への提示資料としても有効だ。

集団データと個人データを使い分ける

上記のような集団データを学年の生徒全体に提示することで、学習に対する意識付けはできるが、国公立大を目指しているのに1年生の模試で偏差値50以下を取ってしまった生徒などには、むしろモチベーションを低下させる材料になりかねない。1年生時に模試成績が振るわなかったが国公立大に合格した先輩の個人のデータを紹介するなど、集団と個人のデータをうまく使い分けたい。

ダウンロード このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/ →HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

目標 3

「前向きな引き継ぎ」を意識する

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

ダウンロード

❺「褒める」視点で生徒を引き継ぐ

「褒める」項目を数多く挙げておき、該当する生徒をピックアップする

項目	クラス	番号	名前	コメント
1年間で成績が急上昇した	1	12	進研太郎	苦手の英語を得意科目にしつつある。
	1	6	▲▲▲▲	コツコツと勉強する。提出物も確実に出す。
部活動を頑張っている	1	34	■■■■	サッカー部で1年生のリーダー的存在に。
	1	2	●●●●	コツコツと努力を続けている。
掃除をまじめにしている	1	22	□□□□	だれも見ていないところでも手を抜かない。
ボランティア活動をしている				
提出物の期限を守る				
リーダーシップを持ってクラスをまとめていた				
謙虚な姿勢を持っている				

固定観念にとらわれずにちょっとしたことから褒めることを見つけコメントすることで、気持ちよく引き継ぐ。生徒1人に1つは褒める点を見いだしたい

生徒一人ひとりについて「褒める」べきところを記述する

氏名	生活面での長所	学習面での長所
■■□□	いつも笑顔でクラスメイトに接することができる。先輩や教師に対しても、きちんとしたコミュニケーションができる。	提出物はしっかりと出している。ノートの取り方も学校の指導に従っている。成績面で成果として表れることを期待している。
△△▲▲	上級生とバンドを組んだ。自分なりにエネルギーを発散させたり、人とコミュニケーションできる場所を見つけようとしている。よい居場所になることを祈っている。	苦手だった数学で、「このままではダメだ」という意識が少しずつ芽生え始めている。まだばん回できるという気持ちを持たせて、取り組ませるチャンスができつつある。
●●○○	三者面談で、保護者から「家の手伝いをとても一生懸命にやっている」という話があった。家庭にしっかりと居場所を持っている。	高1最後の定期テストで、初めて総合順位が100番台に上昇。本人もとても喜んでいた。成績に関する向上心はまだまだしっかり持っている。

データ作成・加工のPOINT

生徒がよい形で、2年生をスタートするためには、新学年団の引き継ぎは非常に重要である。進級は生徒にとっては仕切り直しをする絶好の機会である。生徒自身、自分の学習習慣や生活習慣に問題があることを感じており、「何とかしないとまずい」と内心焦っているものだ。その焦りを自己変革のエネルギーとさせたいが、その際、教師に求められるのは「生徒の仕切り直しをあと押しするような、肯定的な目で生徒を見る」ということだ。新担任は、新学期が始まる前に評定や欠席、遅刻、早退、模試成績、部活動などを把握するが、その際、生徒の問題点ばかりに目を向け、マイナスの先入観を持たないようにしたい。注意すべき内容を引き継ぐことは重要だが、❺のように生徒の褒めるべき点を積極的に引き継ぐことも必要だ。新担任も新クラスに期待を抱き、前向きに向き合えるはずだ。

プラスαの一工夫

把握しておきたい「掃除」「提出物」「遅刻」「家庭」

掃除にしっかり取り組む、提出物の期限を守る、遅刻をしないなどの学校生活の基本ができているかどうかは、生徒理解のために重要だ。4月、新担任が指導を徹底するためにも、確実に引き継いでおきたい項目だ。また、具体的に志望校を決めていく2年生だからこそ、各家庭の進学費用に関する考え方は確実に新担任に引き継いでおきたい。

褒める引き継ぎ資料は面談にも使う

生徒は、どんなことであれ、教師から褒められれば嬉しいものだ。それが新担任からであれば、新学年のやる気にもつながる。引き継ぎ資料で褒めるべき点を把握して、「1年のときの担任の○○先生が、部活動の集中力はきっと勉強にも役立つと褒めていたよ」などと声をかければ、前向きに2年生をスタートできるはずだ。

教科担任の声を聞きより深い生徒把握を

クラス担任だけでなく、教科担任の生徒評価を聞くことで、より詳細な生徒把握が可能になる。提出物の状況、授業態度、興味・関心などから褒めるべき点を見つけていく。

ウェブサイトからダウンロード!

生徒指導・進路指導ツール集

Benesse® 教育研究開発センター
http://benesse.jp/berd/

生徒指導ツール集 検索 クリック!

HOME ＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください。

加工可能な資料がダウンロードできます！

このコーナーで紹介してきた図版や関連する図版は、加工可能な形でウェブサイトにアップする予定です。
学校の実態に合わせてご活用ください。

- 1年間の振り返りアンケート
- 学習時間調査

…などです!

人気のダウンロードデータ例

学習の記録（生活時間帯併記型）
生徒に自らの学習状況を客観的に把握させ、具体的な改善点や安心材料を指摘するためのツール。起床・帰宅・学習開始・就寝の時間を固定させ、生活のリズムを整えさせてください。

先輩が進路を決めた理由
面談などの場で生徒に提示すれば、先輩の進路決定の道のりを見ながら、「では、自分はどのように決めていくのか」を模索するきっかけとなるツールです。

VIEW21 のすべての記事は、Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトでご覧になれます。

目標 4 休み明けに新クラスの一体感を醸成する

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

ダウンロード

❻ 2年生のスタートにあたって

2年　　組　　番　名前

シートは一人ひとりに作成させても、グループで作成させてもよい。生活面・学習面に分けることも可能

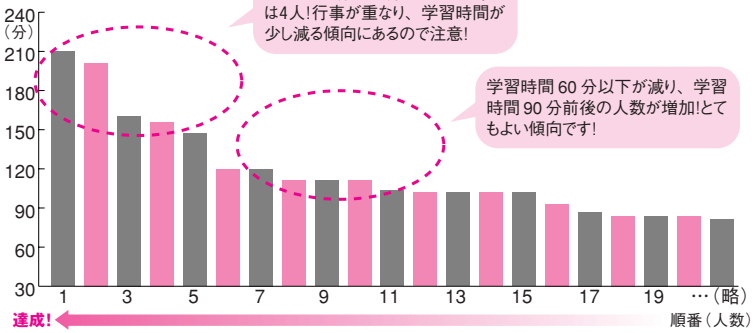
●2年（　）組のモットーは何ですか。

●そのためにきみ自身はクラスでどんな役割を担いたいですか。

●2年（　）組の今年の一番の目標は何ですか

●そのためにきみ自身はどんな努力をしたいですか。

❼ 学習時間調査



データ作成・加工のPOINT

新クラスになじめず悩む生徒も出てくる4月には、クラスの一体感を醸成する仕掛けが必要だ。2年生スタート時に❻のようなシートを書かせると、「一致団結できるクラスに」「明るくみんなで勉強できるクラスに」などと書く生徒が多い。生徒自身の「クラスでまとまりたい」という期待感を言語化することで、クラスみんなで頑張っていこうという一体感の醸成をあと押しできる。また、日々の学習記録の結果を❼のように集計し、クラス内に貼り出すのも効果的だ。担任がコメントを書き込み、生徒の頑張りを応援するムードをつくりたい。

プラスαの一工夫

定期テストまでのスケジュールを提示
2年生に進級し、モチベーションが高いうちに「学習する→成果が得られる」という経験を数多く積ませたい。各教科で、定期試験までの学習スケジュールを作成し、徹底する。小テストなどを織り込み、できるだけ多くの生徒に達成感を与えながら、最初の定期テストで結果を残させるように指導したい。

学習の仕方を再度徹底する
生徒は予習や復習の仕方、定期試験・模試などへ自分なりの取り組み方ができ上がりつつある。この時期、学校として各教科の学習法を改めて提示する。できていない生徒には参考になり、できている生徒にとっても、自分の学習法を再考するきっかけになる。

ダウンロード このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/ →HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

人材を育てながら良質な授業の提供を目指す

12月号特集の富山県立富山高校や山口県立山口高校の取り組みは、多くの示唆を与えてくれた。特に、富山高校が行う「互見」授業の実施報告書、教科部会のまとめ、授業評価シートは、大変参考になった。自校の授業評価の改善点が整理できたと共に、学校組織として指導法を確立し、均質で良質な授業を提供することの大切さを痛感した。自校も若返りの最中で、人材を育てながら組織マネジメントを行い、学校を活性化し、成果を上げるのが課題だ。再度、自校の強みと弱みを分析したい。［徳島県・匿名希望］

取り組みを参考に、自校の組織を振り返る

12月号の特集は、組織として何ができるのか、何をすべきかを考えながら読んだ。富山県立富山高校には教科部会の力を感じた。どの教科がどのような意図を持って指導するのか、伸ばしたい分野や力はどこなのかなどを、学校として共有していることがわかった。それらの情報を基に、担任は生徒に向き合って面談できる。また、岐阜県の入試研究会からは、学校組織として若手教師を育てている様子がうかがえた。中堅・ベテラン教師が若手を厳しく指導する一方、温かく見守っている姿が想像できた。

［静岡県・匿名希望］

指導における「総合知」の重要性を実感

12月号の「指導変革の軌跡」の和歌山県立桐蔭高校と北海道札幌旭丘高校の記事は、進学校としての実績を持つ学校がステップアップするための方策は何か、という観点から興味深く読んだ。単なる受験指導というよりも、桐蔭高校の記事にあった「総合知」といった観点を持つことが重要だと実感した。

［群馬県・高崎経済大学附属高校・島崎健一］

「地域の信頼」と「進路保障」が学校評価の指標に

12月号の「指導変革の軌跡」の鹿児島県立喜界高校の取り組みが参考になった。制度の精選や、生徒個々に対するきめ細かい指導が、成果に結び付いていると感じた。保護者の学校に対する期待の大きさが、先生方の原動力になっているのではないだろうか。「地域の信頼」と「進路保障」は、密接に結び付いていると私は思う。学校規模の差はあっても、学校そのものを評価する有効な指標の一つであることは間違いない。

［北海道・匿名希望］

「生きたデータ」を活用し、学習習慣を改善

12月号の「生きたデータの見せ方・つくり方」の目標3「志望を高めさせながら学習へ導く」のシートは、学習習慣の改善に即効性があると思う。スタディーサポートや進研模試などの情報がうまく統合された好例だった。ウェブサイトから4枚ともダウンロードして使っている。

［鹿児島県・匿名希望］

読者のページ　VIEW'S SQUARE　Volume 6

教育最前線からのホットな話題を紹介します

教師川柳

携帯が　日々の学びを　軽退化

兵庫県立社高校・丸山正人

編集後記

12月号の学校事例を読んだ先生から「全国でも自分と同じ思いで指導されている先生がいて、勇気付けられた」「自校と同様の環境で頑張っている学校に刺激を受けた」と感想をいただきました。学校事例を紹介する際は、単なる仕組みやノウハウではなく、その指導に込められた「先生の思い」やその学校を取り巻く「背景情報」をしっかり盛り込むことが大切だと感じました。読者の先生方が事例校とつながり、元気になっていただけるような記事をこれからも届けていきたいと思います。（松平）

『VIEW21』へのご意見・ご感想をBenesse教育研究開発センターのウェブサイトからお寄せください

下記の手順でアクセスしてください。

① 「Benesse教育研究開発センター」のトップページの「情報誌ライブラリ」の「高校向け」のプルダウンメニューをクリックしてください。

②画面右端の『VIEW 21』の表紙の下にある「読者アンケートにご協力をお願いします」をクリックしてください。

③入力フォームが表示されますので、ご記入の上、送信してください。

小誌に対してお寄せいただいた「全国の読者の声」がウェブサイトでご覧いただけます。

http://benesse.jp/berd/

VIEW21　2009 April 4月 Volume 1

次号は 4月1日発行（予定）
『VIEW21』高校版は年6回の発行です

VIEW21　2月号 Vol.6　2009年2月23日発行

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション　Benesse教育研究開発センター
印刷製本　大日本印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　中丸満、二宮良太、山田清機
撮影協力　荒川潤、川上一生、川本聖哉、谷口哲

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部
〒163-1422　東京都新宿区西新宿3-20-2　東京オペラシティタワー22階
電話　03-5371-1238

©Benesse Corporation 2009